別記様式第２号（その１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

基　本　計　画　書

<table>
<tr><th colspan="9">基　本　計　画</th><th></th></tr>
<tr><td colspan="2">事　項</td><td colspan="7">記　入　欄</td><td>備　考</td></tr>
<tr><td colspan="2">計画の区分</td><td colspan="7">学部の設置</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">フリガナ
設置者</td><td colspan="7">ｶﾞｯｺｳﾎｳｼﾞﾝ ﾒｲｾｲｶﾞｸｴﾝ
学校法人　明星学苑</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">フリガナ
大学の名称</td><td colspan="7">ﾒｲｾｲﾀﾞｲｶﾞｸ
明星大学 (Meisei University)</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">大学本部の位置</td><td colspan="7">東京都日野市程久保２丁目１番地１号</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">大学の目的</td><td colspan="7">明星大学は、設置者である学校法人明星学苑の建学の精神である「和の精神のもと、世界に貢献する人を育成する」に基づき、広い教養と深い専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、自己実現を目指し、社会に貢献する人を育成することを目的とする。この目的を実現するための教育研究の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">新設学部等の目的</td><td colspan="7">（デザイン学部デザイン学科の目的）
デザイン学部では、価値創造のための実践的能力と専門的な制作技術の融合を図り、デザインに関する広く豊かな教養と視野を身に付けさせ、専門的知識・技能を育成することにより、個々人の価値観が多様化する現代社会において、「企画力（分析力・発想力・統合力）」と「表現力（美的構成力・プレゼンテーション力・コミュニケーション力）」と優れたデザイン力をもって、社会生活の様々な場面で、実現可能な企画を提案し、説得力のある表現力を発揮することで、ヒト・コト・モノの豊かな関係を築き、新たな価値を生み出すことにより、社会に貢献する人間性豊かな人材を養成することで、明星大学の「教育目標」を実現する。</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">新設学部等の概要</td><td>新設学部等の名称</td><td>修業年限</td><td>入学定員</td><td>編入学定員</td><td>収容定員</td><td>学位又は称号</td><td>開設時期及び開設年次</td><td>所在地</td><td rowspan="3"></td></tr>
<tr><td>デザイン学部
[School of Design]

デザイン学科
[Department of Design]</td><td>年
4</td><td>人
120</td><td>年次人
－</td><td>人
480</td><td>学士(デザイン学)</td><td>年　月
第　年次
平成26年4月
第1年次</td><td>東京都日野市程久保２丁目１番地１号</td></tr>
<tr><td>計</td><td></td><td>120</td><td>－</td><td>480</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）</td><td colspan="7">○明星大学
※平成26年4月より研究科の設置（平成25年6月別途届出）
教育学研究科　教育学専攻（通学課程）
（博士前期課程）　（研究科の設置）　(10)
（博士前期課程）　（研究科の設置）　(3)
※平成26年4月より学生募集停止
造形芸術学部　造形芸術学科　（廃止）　(△90)
人文学研究科　教育学専攻（通学課程）
（博士前期課程）　（廃止）　(△10)
（博士後期課程）　（廃止）　(△3)
※平成26年度より入学定員の変更
情報学部　情報学科　[定員減]　(△30)
※平成26年度より名称変更（平成25年6月別途届出）
人文学研究科（通信課程）　→　教育学研究科（通信課程）</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">教育課程</td><td rowspan="2">新設学部等の名称</td><td colspan="4">開設する授業科目の総数</td><td colspan="3" rowspan="2">卒業要件単位数</td><td rowspan="3"></td></tr>
<tr><td>講義</td><td>演習</td><td>実習</td><td>計</td></tr>
<tr><td>デザイン学部
デザイン学科</td><td>132科目</td><td>106科目</td><td>19科目</td><td>257科目</td><td colspan="3">124単位</td></tr>
</table>

		学部等の名称	専任教員等						兼任教員	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
教員組織の概要	新設分	デザイン学部　デザイン学科	人 7 (9)	人 6 (6)	人 0 (0)	人 0 (0)	人 13 (15)	人 0 (0)	人 12 (10)	
		計	7 (9)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	13 (15)	0 (0)	12 (10)	
	既設分	理工学部　総合理工学科	35 (35)	16 (16)	2 (2)	3 (3)	56 (56)	0 (0)	64 (64)	
		人文学部　国際コミュニケーション学科	7 (7)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	7 (7)	
		人文学部　人間社会学科	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	10 (10)	
		人文学部　心理学科	7 (7)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	23 (23)	
		人文学部　日本文化学科	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	21 (21)	
		人文学部　福祉実践学科	6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	21 (21)	
		経済学部　経済学科	17 (17)	6 (6)	3 (3)	2 (2)	28 (28)	0 (0)	13 (13)	
		情報学部　情報学科	12 (12)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	22 (22)	
		教育学部　教育学科 教育学部　教育学科（通信課程）	38 (38)	29 (29)	0 (0)	1 (1)	68 (68)	0 (0)	90 (90)	
		経営学部　経営学科	8 (8)	7 (7)	1 (1)	2 (2)	18 (18)	0 (0)	9 (9)	
		全学共通教育	21 (21)	9 (9)	1 (1)	1 (1)	32 (32)	0 (0)	106 (106)	
		計	162 (162)	93 (93)	8 (8)	9 (9)	272 (272)	0 0	386 (386)	
	合　計		169 (171)	99 (99)	8 (8)	9 (9)	285 (287)	0 (0)	398 (396)	

	職種	専任	兼任	計	
教員以外の職員の概要	事務職員	人 193 (193)	人 103 (103)	人 296 (296)	大学全体
	技術職員	7 (7)	0 0	7 (7)	
	図書館専門職員	5 (5)	0 (0)	5 (5)	
	その他の職員	6 (6)	16 (16)	22 (22)	
	計	211 (211)	119 (119)	330 (330)	

	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
校地等	校舎敷地	197,697㎡	0㎡	0㎡	197,697㎡	・日野校
		683,812㎡	0㎡	0㎡	683,812㎡	・青梅校
	運動場用地	74,314㎡	0㎡	0㎡	74,314㎡	・日野校
		94,320㎡	0㎡	0㎡	94,320㎡	・青梅校
	小計	272,011㎡	0㎡	0㎡	272,011㎡	・日野校
		778,132㎡	0㎡	0㎡	778,132㎡	・青梅校
	その他	14,758㎡	0㎡	0㎡	14,758㎡	・日野校
		18,621㎡	0㎡	0㎡	18,621㎡	・青梅校
	合計	1,083,522㎡	0㎡	0㎡	1,083,522㎡	大学全体

校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
校舎	179,566㎡ (164,392㎡)	0㎡ (　0㎡)	0㎡ (　0㎡)	179,566㎡ (164,392㎡)	・日野校
校舎	32,714㎡ (32,714㎡)	0㎡ (　0㎡)	0㎡ (　0㎡)	32,714㎡ (32,714㎡)	・青梅校
合計	212,280㎡ (197,106㎡)	0㎡ (　0㎡)	0㎡ (　0㎡)	212,280㎡ (197,106㎡)	大学全体

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
教室等	92 室	194 室	204 室	21 室 （補助職員　8人）	2 室 （補助職員　4人）	・日野校
	23 室	8 室	36 室	1 室 （補助職員　2人）	0 室 （補助職員　0人）	・青梅校
	115 室	202 室	240 室	22 室 （補助職員　10人）	2 室 （補助職員　4人）	大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室数	
専任教員研究室	デザイン学部　デザイン学科	16 室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書〔うち外国書〕冊	学術雑誌〔うち外国書〕種	電子ジャーナル〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
図書・設備	デザイン学部 デザイン学科	28,907〔11,833〕 (28,107〔11,433〕)	227〔48〕 (227〔48〕)	2〔2〕 (2〔2〕)	541〔1〕 (541〔1〕)	884 (884)	23 (23)	大学全体での共用分 図　書：908,153冊〔283,551冊〕 学術雑誌：2,245種〔622種〕
	計	28,907〔11,833〕 (28,107〔11,433〕)	227〔48〕 (227〔48〕)	2〔2〕 (2〔2〕)	541〔1〕 (541〔1〕)	884 (884)	23 (23)	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
図書館	16,865 ㎡	728 席	1,526,000 冊	・日野校
	4,343 ㎡	292 席	363,000 冊	・青梅校
	21,208 ㎡	1,020 席	1,889,000 冊	大学全体

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要	
体育館	8,006㎡	野球場、テニスコート	・日野校
	4,928㎡	野球場、テニスコート	・青梅校
	12,934㎡		大学全体

経費の見積り及び維持方法の概要

経費の見積り	区分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
経費の見積り	教員１人当り研究費等		600千円	600千円	600千円	600千円	－	－	
	共同研究費等		40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	－	－	共同研究費等は大学全体
	図書購入費	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	－	－	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用コスト含む）を含む。
	設備購入費	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	－	－	設備購入費は大学全体

学生１人当り納付金	学部	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
学生１人当り納付金	デザイン学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	－　千円	－　千円
	理工学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	－　千円	－　千円
	人文学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	－　千円	－　千円
	経済学部	1,200千円	950千円	950千円	950千円	－　千円	－　千円
	情報学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	－　千円	－　千円
	教育学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	－　千円	－　千円
	教育学部（通信課程）	144千円	114千円	114千円	114千円	－　千円	－　千円
	経営学部	1,200千円	950千円	950千円	950千円	－　千円	－　千円

学生納付金以外の維持方法の概要	手数料収入、資産運用収入及び私立大学等経常経費補助金　等

既設大学等の状況

大学の名称	明星大学								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
（学部）									
理工学部						**1.06**		東京都日野市程久保２丁目１番地１号	
総合理工学科	4	400	－	1,600	学士（理学） 学士（工学）	1.06	平成22年度		
物理学科	4	－	－	－	学士（理学）	－	昭和39年度		**平成22年4月より学生募集停止** （物理学科・化学科・機械システム工学科・電気電子システム工学科・建築学科・環境システム学科）
化学科	4	－	－	－	学士（理学）	－	昭和39年度		
機械ｼｽﾃﾑ工学科	4	－	－	－	学士（工学）	－	平成17年度		
電気電子ｼｽﾃﾑ工学科	4	－	－	－	学士（工学）	－	平成17年度		
建築学科	4	－	－	－	学士（工学）	－	平成17年度		
環境ｼｽﾃﾑ学科	4	－	－	－	学士（工学）	－	平成17年度		
機械工学科	4	－	－	－	学士（工学）	－	昭和39年度		**平成17年4月より学生募集停止** （機械工学科・電気工学科）
電気工学科	4	－	－	－	学士（工学）	－	昭和39年度		
人文学部						**1.10**			
国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科	4	100	－	400	学士(国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学)	1.17	平成17年度		**平成22年4月より入学定員変更** **(国際コミュニケーション学科140→100** **人間社会学科140→80)**
人間社会学科	4	80	－	320	学士（社会学）	1.15	昭和40年度		
心理学科	4	110	－	440	学士（心理学）	1.13	平成22年度		
日本文化学科	4	100	－	400	学士（文学）	1.09	平成22年度		
福祉実践学科	4	60	－	240	学士（社会福祉学）	0.92	平成22年度		
心理・教育学科	4	－	－	－	学士(心理学) 学士(教育学)	－	昭和40年度		**平成22年4月より学生募集停止** （心理・教育学科）
経済学部						**1.09**			
経済学科	4	300	－	1,160	学士（経済学）	1.09	平成13年度		**平成24年4月より入学定員変更(経済学科280→300)**
経営学科	4	－	－	－	学士（経営学）	－	平成17年度		**平成24年4月より学生募集停止** （経営学科）
情報学部						**1.03**			
情報学科	4	170	－	680	学士（情報）	1.03	平成17年度		
日本文化学部						－			**平成22年4月より学生募集停止** （日本文化学部言語文化学科）
言語文化学科	4	－	－	－	学士（文学）	－	平成4年度		
造形芸術学部						**0.64**		東京都青梅市長淵２丁目５９０	**平成24年4月より入学定員変更（造形芸術学科150→90）**
造形芸術学科	4	90	－	480	学士（芸術）	0.64	平成17年度		
教育学部						**1.24**		東京都日野市程久保２丁目１番地１号	
教育学科	4	320	－	1,280	学士（教育学）	1.24	平成22年度		
経営学部						**1.05**			
経営学科	4	200	－	400	学士（教育学）	1.05	平成24年度		
（通信教育部）									
教育学部						**0.04**			
教育学科 （通信課程）	4	2,000	－	8,000	学士（教育学）	0.04	平成22年度		
人文学部						－			**平成22年4月より学生募集停止** （人文学部心理･教育学科（通信課程））
心理・教育学科 （通信課程）	4	－	－	－	学士（教育学）	－	昭和42年度		

既設大学等の状況	（大学院）									
	理工学研究科								東京都日野市 程久保２丁目１番 地１号	
	(博士前期課程)						0.43			
	物理学専攻	2	10	－	20	修士(理学)	0.25	昭和54年度		
	化学専攻	2	10	－	20	修士(理学)	0.55	昭和48年度		
	機械工学専攻	2	10	－	20	修士(工学)	0.45	昭和55年度		
	電気工学専攻	2	10	－	20	修士(工学)	0.05	昭和54年度		
	建築・建設工学専攻	2	5	－	10	修士(工学)	0.30	平成20年度		
	環境ｼｽﾃﾑ学専攻	2	5	－	10	修士(工学)	1.40	平成20年度		
	(博士後期課程)						0.05			
	物理学専攻	3	5	－	15	博士(理学)	0.06	昭和56年度		
	化学専攻	3	5	－	15	博士(理学)	0.13	昭和51年度		
	機械工学専攻	3	5	－	15	博士(工学)	0.00	昭和57年度		
	電気工学専攻	3	5	－	15	博士(工学)	0.06	昭和56年度		
	建築・建設工学専攻	3	3	－	6	博士(工学)	0.00	平成20年度		
	環境ｼｽﾃﾑ学専攻	3	2	－	4	博士(工学)	0.00	平成20年度		
	人文学研究科									
	(博士前期課程)						0.35			
	英米文学専攻	2	10	－	20	修士(英米文学)	0.15	昭和58年度		
	社会学専攻	2	10	－	20	修士(社会学)	0.05	昭和46年度		
	心理学専攻	2	10	－	20	修士(心理学)	1.05	昭和49年度		
	教育学専攻	2	10	－	20	修士(教育学)	0.15	昭和47年度		
	(博士後期課程)						0.31			
	英米文学専攻	3	3	－	9	博士(英米文学)	0.00	昭和63年度		
	社会学専攻	3	3	－	9	博士(社会学)	0.00	昭和51年度		
	心理学専攻	3	3	－	9	博士(心理学)	0.88	昭和53年度		
	教育学専攻	3	3	－	9	博士(教育学)	0.11	昭和49年度		
	経済学研究科									
	(修士課程)						0.50			
	応用経済学専攻	2	10	－	20	修士(応用経済学)	0.50	平成18年度		
	情報学研究科									
	(博士前期課程)						0.28			
	情報学専攻	2	7	－	14	修士(情報学)	0.28	平成10年度		
	(博士後期課程)						0.11			
	情報学専攻	3	3	－	9	博士(情報学)	0.11	平成12年度		
	（通信制大学院）									
	人文学研究科									
	(博士前期課程)						0.70			
	教育学専攻 （通信課程）	2	30	－	60	修士(教育学)	0.70	平成11年度		
	(博士後期課程)						1.78			
	教育学専攻 （通信課程）	3	3	－	9	博士(教育学)	1.78	平成18年度		

既設大学等の状況									
大学の名称	いわき明星大学								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
（学部）									
科学技術学部						0.65		福島県いわき市中央台飯野5丁目5番地1	
科学技術学科	4	130	―	520	学士(工学)	0.65	平成22年度		
電子情報学科	4	―	―	―	学士(工学)	―	平成17年度		平成22年4月より学生募集停止（電子情報学科・ｼｽﾃﾑﾃﾞｻﾞｲﾝ工学科・生命環境学科）
ｼｽﾃﾑﾃﾞｻﾞｲﾝ工学科	4	―	―	―	学士(工学)	―	平成17年度		
生命環境学科	4	―	―	―	学士(理工学)	―	平成17年度		
人文学部						0.67			
表現文化学科	4	90	―	360	学士(文学)	0.59	平成17年度		
現代社会学科	4	95	―	380	学士(社会学)	0.54	昭和62年度		
心理学科	4	90	―	360	学士(心理学)	0.90	平成13年度		
薬学部						0.58			
薬学科	6	90	―	720	学士(薬学)	0.58	平成19年度		平成23年4月より入学定員変更(薬学科150→90)
（大学院）									
理工学研究科									
(修士課程)						0.49			
物質理学専攻	2	7	―	14	修士(物質理学)	0.43	平成4年度		
物理工学専攻	2	7	―	14	修士(物理工学)	0.57	平成4年度		
(博士課程)						0.00			
物質理工学専攻	3	2	―	9	博士(理工学)	0.00	平成6年度		平成23年4月より入学定員変更(物質理工学専攻5→2)
人文学研究科									
(修士課程)						0.20			
日本文学専攻	2	5	―	10	修士(日本文学)	0.00	平成4年度		
英米文学専攻	2	5	―	10	修士(英米文学)	0.10	平成7年度		
社会学専攻	2	5	―	10	修士(社会学)	0.20	平成4年度		
臨床心理学専攻	2	10	―	20	修士(臨床心理学)	0.35	平成17年度		
(博士課程)						0.00			
日本文学専攻	3	2	―	6	博士(日本文学)	0.00	平成6年度		

附属施設の概要	該当なし

（新設学部）

教育課程等の概要

（デザイン学部　デザイン学科）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
全学共通科目	自立と体験１	1前	2			○			2	1				
	哲学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	哲学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	倫理学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	倫理学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	論理学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	論理学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	宗教学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	宗教学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	美学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	美学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	心理学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	心理学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	教育学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	教育学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	倫理学３	2･3･4前		2		○								兼1
	倫理学４	2･3･4後		2		○								兼1
	美学３	2･3･4前		2		○								兼1
	美学４	2･3･4後		2		○								兼1
	哲学３	2･3･4前		2		○								兼1
	哲学４	2･3･4後		2		○								兼1
	思想への招待	1･2･3･4前		2		○								兼1
	健康・スポーツ科学論	1･2･3･4前･後	2			○								兼3
	健康・スポーツ演習１	1前･後	1				○							兼7
	健康・スポーツ演習２	2前･後		1			○							兼7
	健康・スポーツ演習３	3前･後		1			○							兼7
	健康・スポーツ演習４	4前･後		1			○							兼7
	外国語（英語）１Ａ	1･2前		1			○							兼5
	外国語（英語）１Ｂ	1･2前		1			○							兼5
	外国語（英語）２Ａ	1･2後		1			○							兼5
	外国語（英語）２Ｂ	1･2後		1			○							兼5
	外国語（ドイツ語）１Ａ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（ドイツ語）１Ｂ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（ドイツ語）２Ａ	1･2後		1			○							兼1
	外国語（ドイツ語）２Ｂ	1･2後		1			○							兼1
	外国語（フランス語）１Ａ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（フランス語）１Ｂ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（フランス語）２Ａ	1･2後		1			○							兼1
	外国語（フランス語）２Ｂ	1･2後		1			○							兼1
	外国語（中国語）１Ａ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（中国語）１Ｂ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（中国語）２Ａ	1･2後		1			○							兼1
	外国語（中国語）２Ｂ	1･2後		1			○							兼1
	外国語（韓国語）１Ａ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（韓国語）１Ｂ	1･2前		1			○							兼1
	外国語（韓国語）２Ａ	1･2後		1			○							兼1
	外国語（韓国語）２Ｂ	1･2後		1			○							兼1
	日本語１Ａ	1･2前		1			○							兼1
	日本語１Ｂ	1･2前		1			○							兼1

（新設学部）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考
全学共通科目	日本語２Ａ	1･2後		1			○							兼1
	日本語２Ｂ	1･2後		1			○							兼1
	情報リテラシーａ	1･2･3･4前	2				○							兼1
	情報リテラシーｂ	1･2･3･4後	2				○							兼1
	言語学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	言語学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	言葉の思想	1･2･3･4前		2		○								兼1
	科学コミュニケーション論	1･2･3･4前		2		○								兼1
	映画と音楽で学ぶ英語	1･2･3･4前		2		○								兼1
	異文化体験	1･2･3･4前		2		○								兼1
	異文化で学ぶ英語	1･2･3･4後		2		○								兼1
	外国語（英語）３Ａ	2･3前		1			○							兼6
	外国語（英語）３Ｂ	2･3前		1			○							兼6
	外国語（英語）４Ａ	2･3後		1			○							兼6
	外国語（英語）４Ｂ	2･3後		1			○							兼6
	外国語（ドイツ語）３Ａ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（ドイツ語）３Ｂ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（ドイツ語）４Ａ	2･3後		1			○							兼1
	外国語（ドイツ語）４Ｂ	2･3後		1			○							兼1
	外国語（フランス語）３Ａ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（フランス語）３Ｂ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（フランス語）４Ａ	2･3後		1			○							兼1
	外国語（フランス語）４Ｂ	2･3後		1			○							兼1
	外国語（中国語）３Ａ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（中国語）３Ｂ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（中国語）４Ａ	2･3後		1			○							兼1
	外国語（中国語）４Ｂ	2･3後		1			○							兼1
	外国語（韓国語）３Ａ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（韓国語）３Ｂ	2･3前		1			○							兼1
	外国語（韓国語）４Ａ	2･3後		1			○							兼1
	外国語（韓国語）４Ｂ	2･3後		1			○							兼1
	日本語３Ａ	2･3前		1			○							兼1
	日本語３Ｂ	2･3前		1			○							兼1
	日本語４Ａ	2･3後		1			○							兼1
	日本語４Ｂ	2･3後		1			○							兼1
	上級英語１	3･4前		1			○							兼1
	上級英語２	3･4後		1			○							兼1
	上級ドイツ語１	3･4前		1			○							兼1
	上級ドイツ語２	3･4後		1			○							兼1
	上級フランス語１	3･4前		1			○							兼1
	上級フランス語２	3･4後		1			○							兼1
	上級中国語１	3･4前		1			○							兼1
	上級中国語２	3･4後		1			○							兼1
	上級韓国語１	3･4前		1			○							兼1
	上級韓国語２	3･4後		1			○							兼1
	上級英語３	4前		1			○							兼1
	上級英語４	4後		1			○							兼1
	上級ドイツ語３	4前		1			○							兼1
	上級ドイツ語４	4後		1			○							兼1
	上級フランス語３	4前		1			○							兼1
	上級フランス語４	4後		1			○							兼1
	上級中国語３	4前		1			○							兼1
	上級中国語４	4後		1			○							兼1
	上級韓国語３	4前		1			○							兼1

（新設学部）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
全学共通科目	上級韓国語４	4後		1			○							兼1
	日本事情１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	日本事情２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	外国事情１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	外国事情２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	日本の文学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	日本の文学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	外国の文学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	外国の文学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	文化人類学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	文化人類学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	人文科学論１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	人文科学論２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	日本史１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	日本史２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	西洋の歴史と文化１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	西洋の歴史と文化２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	中国の歴史と文化１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	中国の歴史と文化２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	考古学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	考古学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	日本の芸能１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	日本の芸能２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	日本民俗学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	日本民俗学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	自然科学史	1･2･3･4前		2		○								兼1
	図像学	1･2･3･4前		2		○								兼1
	人文科学論３	2･3･4前		2		○								兼1
	人文科学論４	2･3･4後		2		○								兼1
	日本史３	2･3･4前		2		○								兼1
	日本史４	2･3･4後		2		○								兼1
	社会の仕組みと人間の営み１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	社会の仕組みと人間の営み２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	法学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	法学２（日本国憲法）	1･2･3･4後		2		○								兼1
	現代政治を読み解く１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	現代政治を読み解く２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	社会科学論１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	社会科学論２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	国際関係論１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	国際関係論２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	２１世紀経済への視点１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	２１世紀経済への視点２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	グローバル時代の経営１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	グローバル時代の経営２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	情報社会文化論１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	情報社会文化論２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	生涯学習論１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	生涯学習論２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	図書館の基礎と展望	1･2･3･4前		2		○								兼1
	社会に生きる私たちの人権	1･2･3･4前		2		○								兼1
	女性の生き方	1･2･3･4後		2		○								兼1
	地図を読む	1･2･3･4前		2		○								兼1
	ボランティア論	1･2･3･4前･後		2		○								兼1

（新設学部）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
全学共通科目	情報法制論	2･3･4前		2		○								兼1
	地球惑星学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	地球惑星学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	科学技術論１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	科学技術論２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	統計学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	統計学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	基礎数学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	基礎数学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	生物学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	生物学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	物理学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	物理学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	化学１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	化学２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	自然科学入門１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	自然科学入門２	1･2･3･4後		2		○								兼1
	生物学３	2･3･4前		2		○								兼1
	生物学４	2･3･4後		2		○								兼1
	人類と環境	2･3･4前		2		○								兼1
	特別講義１	1･2･3･4前		2		○								兼1
	特別講義２	1･2･3･4前		1		○								兼1
	特別講義３	1･2･3･4後		2		○								兼1
	特別講義４	1･2･3･4後		1		○								兼1
	小計（181科目）	―	9	279	0	―			2	1	0	0	0	兼82
全学共通社会的・職業的自立促進科目	自立と体験３	2後			2	○								兼3
	自立と体験４	3前			2	○								兼3
	小計（2科目）	―	0	0	4	―			0	0	0	0	0	兼5

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科科目	理論科目	デザイン概論	1前	2			○			1	1					
		色彩学	1前		2		○			1	1					
		デザイン史	1後		2		○				1					
		美術史概論	1後		2		○								兼1	
		デザイン図学	1後		2		○								兼1	
		デザインと人	2前		2		○								兼2	オムニバス
		視覚メディア論	2前		2		○				1					
		材料学	2前		2		○								兼1	
		デザインと文化	2後		2		○			1	1					
		日本・東洋美術史	2後		2		○								兼1	
		マンガ・アニメーション史	2後		2		○				1					
		デザインとテクノロジー	3前		2		○								兼1	
		論考と構成	3前		2		○			2	2					
		小計（13科目）	－	2	24	0	－			4	5	0	0	0	兼5	－
	技術科目	表現基礎実習A（平面構成）	1前		1				○	1						
		表現基礎実習B（立体構成）	1前		1				○		1					
		表現基礎実習C（イメージ描画）	1前		1				○		1					
		表現基礎実習D（デッサン）	1前		1				○	2						
		表現基礎実習E（レンダリング・モデリング）	1後		1				○						兼2	オムニバス
		表現基礎実習F（印刷技法）	2前		1				○	1						
		表現基礎実習G（彫塑）	2後		1				○	1						
		コンピュータ表現基礎実習1	1前	1					○		1					
		コンピュータ表現基礎実習2	1後	1					○		1					
		コンピュータ表現応用実習	2前		1				○	1						
		材料加工実習A（紙・布・木）	1前		1				○	2						
		材料加工実習B（金属・樹脂・新素材）	1後		1				○	1	1					
		材料加工実習C（土・ｶﾞﾗｽ）	2前		1				○	1	1					
		デザイン製図実習	1後		1				○						兼1	
		デジタル工作実習	2前		1				○						兼1	
		メディア表現実習	2後		1				○						兼1	
		シナリオ制作実習	2後		1				○						兼1	
		サウンドデザイン実習	3前		1				○						兼1	
		クラフトデザインA	3前		2			○		1	1					
		クラフトデザインB	3後		2			○		1	1					
		小計（20科目）	－	2	20	0	－			6	4	0	0	0	兼7	－
	企画表現科目	企画表現演習1	1前	2				○		1	4					
		企画表現演習2	1後	2				○		1	2				兼1	
		企画表現演習3	2前	2				○		3	2					
		企画表現演習4	2後	4				○		2	3					
		企画表現演習5	3前	4				○		1	3					
		企画表現演習6	3後	4				○		4	2					
		企画表現演習7	4前	4				○		2	3					
		小計（7科目）	－	22	0	0	－			6	6	0	0	0	兼1	－

（新設学部）

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科科目	視覚デザインコース科目	視覚デザイン基礎演習	1後		2			○		1	2					オムニバス
		グラフィックデザインA	2前		4			○		1						
		グラフィックデザインB	2後		4			○		1						
		グラフィックデザインC	3前		4			○		1						
		マンガデザインA	2前		4			○			1					
		マンガデザインB	2後		4			○			1					
		マンガデザインC	3前		4			○			1					
		メディアデザインA	2前		4			○			1					
		メディアデザインB	2後		4			○			1					
		メディアデザインC	3前		4			○			1					
		視覚デザインコラボレーション	3後		2			○		2	1					
		小計（11科目）	―	0	40	0	―			3	3	0	0	0		―
	生活デザインコース科目	生活デザイン基礎演習	1後		2			○		3						オムニバス
		プロダクトデザインA	2前		4			○		1						
		プロダクトデザインB	2後		4			○		1						
		プロダクトデザインC	3前		4			○		1						
		インテリアデザインA	2前		4			○		1						
		インテリアデザインB	2後		4			○		1						
		インテリアデザインC	3前		4			○		1						
		ファッションデザインA	2前		4			○		1						
		ファッションデザインB	2後		4			○		1						
		ファッションデザインC	3前		4			○		1						
		生活デザインコラボレーション	3後		2			○		2	1					
		小計（11科目）	―	0	40	0	―			3	1	0	0	0		―
	キャリア科目	自立と体験2	1後	2			○			2	2					
		デザインキャリア特別講義	2後		2		○				1					
		インターンシップ	3前		2				○		1					集中
		小計（3科目）	―	2	4	0	―			2	2	0	0	0		―
	デザインビジネス科目	ポップカルチャービジネス論	3前		2		○				1					
		照明演出論	3前		2		○								兼1	
		インタラクティブデザイン論	3前		2		○								兼1	
		インターネットビジネス論	3後		2		○				1					
		ブランディング論	3後		2		○			1						
		ソーシャルデザイン論	3後		2		○				1					
		デザインマネジメント論	4前		2		○			1						
		デザインと法	4前		2		○								兼1	
		小計（8科目）	―	0	16	0	―			1	3	0	0	0	兼3	―
学科科目	卒業研究	卒業研究	4通	8				○		6	5					
		小計（1科目）	―	8	0	0	―			6	5	0	0	0	0	―
合計（257科目）			―	45	423	4	―			7	6				兼102	―

学位又は称号	学士（デザイン学）	学位又は学科の分野	美術関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
全学共通科目から32単位以上、学科科目から必修科目36単位を含む92単位以上、合計124単位以上修得すること。 〔履修科目の登録の上限：45単位（年間）〕	１学年の学期区分	2学期
	１学期の授業期間	15週
	１時限の授業時間	90分

別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（デザイン学部　デザイン学科）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	自立と体験１	本学の教育目標を達成する最初の科目であり、自己実現の第一歩として設ける。初年時教育の一環として、新入生全員を対象に行う。30人程度のクラスを４～５班に分け、グループワークを通じて他者とのコミュニケーションスキルを向上させるとともに、最終的には「自分史」を執筆することにより自らの目標を明確化させて大学生としての自覚・自立を促していくことを目的とする。	
	哲学１	哲学は、時代・地域に限定されない根源的な考察を展開する思考の営みである。そのために哲学は、人間の知的・文化的活動にかかわる広範囲な分野に繋がっている。本講義では、文学や芸術、宗教などをも素材としながら、哲学という思考の大筋を理解できるようにしたい。「哲学とは何か」という基本的な問題から始まって、哲学において用いられる術語や概念などに馴れ親しむことができるように、原典の解説などを含めて、哲学の基本的な考え方を紹介する。	
	哲学２	「他者」とは何か。他人が気にならない人はいない。我々が日常味わうストレスは、詰まるところ他人との関係に起因している。また、時に我々は、誰も見ていないのに誰かに見られているという思いにとりつかれる。このどこからやってくるのか分からない「視線」は、高ずれば人の神経・精神を侵すに至る。「他人・他者」とは、我々の生き方に根底において関わってくる何ものかである。この問題について、主にフロイトとラカンの精神分析的な立場から幾人かの哲学者・文学者の観点について検討する。	
	倫理学１	行為の善悪に深くかかわる倫理学の問題は、同時に人間の生への問いでもある。有限な人間が、自分自身を凌駕し拘束する規範や原理へと応じるという課題がそこには含まれるからである。「自分とは何か」といった根本的な問いかけから始まり、他者との関係、世界との関係へと展開する人間の生の活動全般が、ここでの考察対象である。ヨーロッパの倫理学を中心としながら、人間の基本的条件やその存在のあり方を深く考えることを目的とする。	
	倫理学２	私たちは「生活」上の、より多く幸福、より少なく不幸などといった比較級に現を抜かしている。その生ぬるい比較級に意識を奪われている。私たちは「人生」の幸福を忘れて生きている。最上級（それは比較級の極まったものに過ぎない）というより、むしろ原級の幸福を忘れている。「人間よ、何故幸福を求めて先を急ぐ。彼は知らないのである。立ち止まれば、その場で幸福であるのに。」このことは、社会学や心理学の対象比較研究では暗点となっている。ひとり反省の学・倫理学のみがこれを考える。	
	論理学１	本講義は、思考の基礎をなす論理を対象とする。私たちが何かあることがらについて考えている場合、そこでは何らかの「推論」が行われている。そして、推論には正しい推論と正しくない推論がある。この授業では、正しい推論とはどのようなものか、そして正しい推論を行うためには何が必要なのかを理解し、正しい推論と誤った推論を区別する能力を身に着けることを目標とする。論理的な思考について理解を深め、正確な文章読解の力を養うことが狙いとなる。論証のタイプの相違なども理解したうえで、論理的思考力の広がりと深まりを期したい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	論理学２	本講義では、論理学の基礎を、記号や推論方式の区別などを素材に、一貫して理解することを目的とする。そのために、通常の文章を記号によって表現する能力を習得し、真理表を作成するなど、論理学の基本的手順を解説する。論理学に関するこうした形式的な手順を習得することよって、正しい推論と正しくない推論を明確に区別し、論理的に一貫した思考の習慣を身につけることを目指す。	
	宗教学１	宗教学とは何か、そもそも宗教学はどのような出自を持ち、どのように展開してきた学問なのか。本講では、宗教学の成り立ち、その構造を確認するとともに、 宗教現象を、信じる者、信じる対象、その両者を結ぶ媒介としての象徴･儀礼から構成されるものと考え、そのそれぞれに即して、宗教学の立場からその見方を提示する。	
	宗教学２	宗教とは何か、という問題を、宗教哲学的に（例えば、宗教と悪の問題）、宗教社会学的に（例えば、宗教と現代社会・世俗化概念の意味とその帰趨）など、さまざまな角度から検討し、人間と宗教の関わり、人間にとって宗教の意味とその役割などについて理解を深める。	
	美学１	美や芸術に関わる重要な概念、主題、思想を取り上げ、具体例を交えながら解説する。「作品」や「表現」など、日常的に用いられる言葉が、美学・芸術学のなかではどのように理解され、またその理解にどのような変遷と拡がりがあるかを解説する。そのために、伝統的な美や芸術のみならず、革新の著しい現代の美や芸術に関わる諸問題も取り上げたい。そして、古今東西の美や芸術の諸現象について全般的な理解を深めていくことで、私たちが生きる現代の感性とは何かを探ることを目標とする。	
	美学２	一方に真善美正利快の序列の中に確とした位置を占める古典美がある。美と快についてのみ「感」がつく。即ち、美感、快感。（正義感は正義漢の誤用）　ニヒリズムの中でニーチェは、最下位の「快」こそ生命の高揚であるという。とすれば「美」の位置はどうなるのか。古典美においては知性X感性の図式内で考えられてきた。位置の揺らいだ「美」は元の位置に戻されねばならぬ。それが、遡って十七世紀、知性の学に倣う感性の学aethetics即ち美学の誕生であった。こうした学は可能か。むしろ日本的な「感」にこそ、その可能性があるのではないか、これを探る講義である。	
	心理学１	心理学の基本的な考えを理解した上で、実証的な心理学に対する興味や関心を高めることが、本講義の目的である。講義では、知覚心理学、思考心理学、感情心理学、社会行動心理学等を通して、人がなぜ誤ったり騙されたりするかについて、「誤り」、「エラーとバイアス」、「騙し」をキー概念にして、人の情報処理過程について心理学の様々な領域について解説していく。日常生活で経験する「誤り」について知ることにより、人の情報処理過程についての理解を深め、日常生活で間違えたり騙されたりしないためにいかにすべきかについて自分で考えられる力を付ける。	
	心理学２	心理学は、自分ではその存在を確信できるのに、いざ客観的に考えようとすると、捉えどころがないように感じられる心の問題を科学的に解明するものである。心理学にはどのような分野があり、それらの分野で心の問題がどのように扱われているかについて、実験心理学を中心に知覚、学習、認識、発達の順序で講義を行う。一般的には、心理学は実際には広範な研究分野があり、それらの具体的な考え方とそこから明らかにされた心の様々な側面を理解することで、心についての考えを深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	教育学１	当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、教育の目的、子供の成長と教育、主にルソーの近代教育思想、デューイ等の現代教育思想、近代学校教育制度の発展の歴史等の順序で講義を行う。なお、現代は教育問題が山積し、教育の制度改革が急激なので、時事的な教育問題について関心を持ち、日頃から自分の考えを形成することを達成目標とする。	
	教育学２	当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、各国の学校教育制度と教育改革、日本の学校教育制度との比較、現代教育の課題と改革、教育行政の諸問題等の順序で講義を進める。なお、現代は教育問題が山積しているが、現代の教育問題を憲法、教育基本法、学校教育法その他の教育法規的視点および教育の歴史的観点から考えることを達成目標とする。	
	倫理学３	現在、生命倫理や環境倫理などさまざまな場面で倫理的思考が要求されるようになった。このような状況を受けて、倫理の基本について学ぶことを目的とする。安楽死やインフォームド・コンセント、現代の環境破壊など、具体的で切迫した問題を手がかりとして、現代における倫理学の展開を考える。加えて、文学や歴史など教養の根底にある倫理的思考を考察する。	
	倫理学４	人間の生のあり方を問う倫理学は、原理的な考察を要求すると同時に、その時代に応じた具体的問題との取り組みが迫られる領域でもある。そのために、人間が実際に生きている社会や歴史をどのように考えるかという問いは、倫理学の重要な問題となる。現代の倫理学にとっては、戦争と平和の問題、グローバリゼーションへの応答などが不可欠である。本講義では、基本的な社会論・歴史論を概観したうえで、現代固有の問題を考察する。	
	美学３	現代の美術・芸術は、既成の価値観や美意識を覆し、新たな美的感性に訴えかけるものとなっている。きわめて難解な前衛芸術から始まり、新たな技術的手段に支えられたコンピュータ・アートやグラフィック、または伝統的には美の対象にならなかった主題までが、現代では美学の対象となっている。ファッションやサブカルチャーなど、現代の多彩な展開を見据えながら、美学の新たな方向と可能性を探っていく。	
	美学４	有史以前から人間は洞窟壁画や舞踏をはじめ、表現活動を文化の一部として繰り広げてきた。本講義では、狭義の芸術に限らず、人間の表現活動全般を多角的に考察することにする。建築・音楽・舞踏・舞台芸術・文学・絵画など、人間の表現活動はきわめて多彩であり、そこには宗教や思想、政治などが複雑に絡み合っている。そうした多様で複雑な文化的営為を「表現」というキーワードで広く考えることを目的とする。	
	哲学３	哲学の歴史とは、それぞれの歴史的時代の具体的状況の内で、人間が哲学的思索を行った足跡を如実に示すものである。そこからは、それぞれの時代や状況が提起を知ることができる。本講義では、そうした哲学の歴史的展開を、主にヨーロッパ哲学を中心に概観する。古代・中世・近代へと時代が進むに従って、どのような問題意識が現れ、それが現代にとってどのような意味をもつのかを考察していく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	哲学４	フロイト『精神分析入門』の第１部「錯誤行為」と第２部「夢」を中心に扱う。フロイトの言う無意識というものが人間の生活においてどのような意義をもっているか、具体的にフロイトの文章を辿りながら検討する。神経症に対する臨床的な医療行為から始まった精神分析が、人間についての深い洞察に支えられた一つの倫理思想であることが理解されるだろう。	
	思想への招待	哲学・倫理学・宗教学・美学など、人文系の思想科目について、広く全般的な案内となることを目標として、それぞれの分野での中心的思想家・著作を紹介していく。抽象的で難解と思われがちな思想・哲学を、なるべく多くの学生が親しみをもてるようなかたちで展開し、初年次用の導入科目とする。	
	健康・スポーツ科学論	現代社会を生きる人々にとって、心と体の健康を維持することは豊かな生活基盤を築く上で大切な課題である。その為には、自らの心や体に対する知識や理解、健康的ライフスタイルの創造(思考・判断力)など「生きる力」を高めるための総合的な学力の獲得が必要である。授業では、運動生理学や健康科学、栄養学、スポーツ科学などの知見を活かしながら講義を展開し、健康を実践的に維持・向上させるための学力の獲得をめざす。	
	健康・スポーツ演習１	本演習では，バスケットボール，太極拳，剣道，リズムダンス，トレーニングなど各種スポーツの中から１種目選択し，各スポーツ種目の実践を通して，思考力・判断力・コミュニケーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために，学生一人一人が自己の興味や能力に応じた課題を持ち，目的によっては，グループで協力して，スポーツの実践や調査，測定・分析などを行ない，最後に成果についてレポートなどによって報告する。本演習を通じて，健康で活動的な生活を送るための，運動やスポーツ実践の意義や重要性について理解することを目的とする。	
	健康・スポーツ演習２	本演習では，バスケットボール，太極拳，剣道，リズムダンス，トレーニングなど各種スポーツの中から１種目選択し，各スポーツ種目の実践を通して，思考力・判断力・プレゼンテーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために，学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んだ課題をさらに発展，あるいは，新しい課題に挑戦するなどして，スポーツの実践や調査，測定・分析などを行ない，最後に成果についてレポートを提出する。本演習を通じて，生涯にわたって主体的に運動やスポーツに取り組むことのできる姿勢を育てることを目的とする。	
	健康・スポーツ演習３	本演習では，バスケットボール，太極拳，剣道，リズムダンス，トレーニングなど各種スポーツの中から１種目を選択し，各種スポーツの実践を通して知識・思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力などを向上させることをねらいとする。そのために，学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ，選択したスポーツ種目と関連した調査，測定・分析などを行ない，その結果について，自己の考えや仲間の考えをまとめるなどしてレポート提出する。本演習を通じて，身体能力の育成に努めるとともに，生涯にわたって自らが主体的，意欲的に仲間とともに運動やスポーツに関わることが出来る姿勢を育てることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	健康・スポーツ演習４	本演習では，バスケットボール，太極拳，剣道，リズムダンス，トレーニングなど各種スポーツの中から１種目を選択し，各種スポーツの実践を通して思考力・判断力・表現力・リーダーシップ能力などを向上させることをねらいとする。そのために，学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ，体験的事実を正確に理解したり，情報を分析・評価し，論述したりする。さらには，課題について，構想を立て実践し，評価・改善することができるようにする。本演習を通じて，学生自らが身体能力の育成に努めるとともに，４年間の演習授業の経験を生かし，卒業後も地域や職場の仲間とともに計画的・継続的な運動環境の調整に関わることができる力を培うことを目的とする。	
	外国語（英語）１Ａ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。 英語１Aは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）１Ｂ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語１Ｂは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を展開していく自律性が求められる。	
	外国語（英語）２Ａ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。 英語２Ａは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語１Ａをさらに発展させ、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）２Ｂ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。 英語２Ｂは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語１Ｂをさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を発展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語）１Ａ	１Ａは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。本科目履修後はドイツ語２Ａを履修することが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）１Ｂ	１Ｂは初級者を対象にして１Ａよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文などの練習をつうじて理解を深める。本科目履修後は、ドイツ語２Ｂを履修することが望ましい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（ドイツ語）２Ａ	２Ａは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。ドイツ語１Ａの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）２Ｂ	２Ｂは初級者を対象にして２Ａよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。１Ｂで補い得ないもの、語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文、講読などの練習をつうじて理解を深める。ドイツ語１Ｂの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（フランス語）１Ａ	フランス語の基礎の学習です。視聴覚教材を取り入れて、まず眼と耳でフランスとフランス語に接し、この１Ａでは初級文法の前半を学びます。２Ａと併せて、最終的にフランスとフランス語に親しみ、話し、読み、書くことの初歩をマスターすることが目標です。	
	外国語（フランス語）１Ｂ	語学＋フランス文化。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（フランス語）２Ａ	「フランス語１Ａ」の学習を基礎にした初級文法の学習が中心になります。この２では、その後半を学びます。１Ａ同様に視聴覚教材を用いて、目と耳からフランス語を取り入れます。	
	外国語（フランス語）２Ｂ	語学＋フランス文化。１Ｂの続きです。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（中国語）１Ａ	中国語学習の準備完了を目指す中国語入門クラスである。最も大切な中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行う。また同時に中国語入門の段階における中国語文法の初歩を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準４級レベルに到達できる簡単な日常挨拶語を約50～80を習得する。	
	外国語（中国語）１Ｂ	中国語１Ｂにおいても中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行うが、主として、基本的にはネイティブが担当するので、簡単な会話の練習に重点を置く。そして、やはり、当該授業を学習を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準４級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）２Ａ	中国語１Ａで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語入門から初級に至る段階における、中国語の語彙、文法を学び中国語の基礎をマスターし、簡単な中国語を聞き、話すことができるようになることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準４級から４級レベルに到達できることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（中国語）２Ｂ	中国語２Ｂにおいても中国語１Ｂで学んだ中国語の基礎を復習をおこなうが、主としてネイティブが担当するので、中国語入門から初級の段階における中国語会話を学び終えた時には、比較的日常的な中国語会話を話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準４級から４級レベルに到達できるようにする。常用語500～1000による中国語単文の日本語訳と日本語の中国語訳ができるようにする。	
	外国語（韓国語）１Ａ	韓国語は初習外国語の中でも文字（ハングル）とその発音を最初に学習する必要があるため、韓国語を母国語とする教師がおこなう外国語（韓国語１Ｂ）との連携は必須である。連携することによって効果的な学習が出来る。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）１Ｂ	韓国語を母国語とする教員によっておこなわれ、日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）１Ａと連携しつつ学習される。ハングルと発音の学習においてはネイティブの教師によって発音に注意される。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）２Ａ	１Ａ，１Ｂで学習したことを踏まえて基本的な文法事項の学習をおこなう。動詞、形容詞、存在詞による肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。また同時に語彙数を増やすことを目標とする。この授業は日本語を母国語とする教員によっておこなわれ、韓国語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）２Ｂと連携しつつおこなわれる。助詞、数詞などの使い方についてもしっかりと学びたい。また文章や単語に現れる韓国の文化の特徴についても注意していきたい。	
	外国語（韓国語）２Ｂ	日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）２Ａと連携しつつおこなわれる。ネイティブによる授業であるので、特に発音に注意したい。また学習する内容に合わせた簡単な会話の練習なども取り入れた学習を行う。基本的な文法事項として、動詞、形容詞、存在詞の肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。	
	日本語１Ａ	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力―講義を理解し、ノートをとり、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力―を定着させることを目標とする。講義を聴く技法、ノートをとる技法・情報の整理法、レポートを書く技法、発表する技法、資料・文献の収集法、レポートを書く技法を中心テーマとして取り上げて、テーマに沿った課題を出し、提出した課題を分析しながら授業を進める。	
	日本語１Ｂ	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。語彙力、読解力を高め、新聞記事や短編小説の大意をつかみ、要約文や粗筋をまとめることができるレベルを目標とする。授業ではさまざまなジャンルの文章を多読・精読し、要約をまとめてもらう。また、映画やアニメーションを鑑賞しながら、その表現の特質を考えていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本語２Ａ	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力—講義を理解し、ノートをとり、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力—を定着させることを目標とする。日本語１Ａで習得した技法を確認・復習しながら、授業で調査・研究結果の発表方法、論文を読む技法を検討する。さらに、実際に課題を決め、関連する課題図書を読んで、研究成果を発表するという形で授業を進める。	
	日本語２Ｂ	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。書く能力、発表能力の強化を図り、自分の意見や感想を的確に発表・記述できることを目標とする。授業では日本社会の幾つかのトピックスを取り上げ、関連する資料を読解しながら、質疑応答や討論を行った上で、各トピックスに対する感想文を提出し、それに対してフィードバックを行うという形で授業を進める。	
	情報リテラシーａ	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシーａでは、情報倫理と基本的なアプリケーションの基礎を中心に習得する。 ※Win基礎・情報倫理・情報検索・画像処理（Photoshop）・ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ作成（HTML）・Word基礎と応用	
	情報リテラシーｂ	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシーｂでは、情報処理の基礎と基本的なアプリケーションの基礎と応用力を中心に習得する。 ※情報処理の基礎・Excel基礎と応用・ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ体験（Access）・ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ体験（Basic）・PowerPoint基礎と応用・総合的な課題	
	言語学１	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、言語学とは何か、音声学(母音・子音)、音韻論、音節構造、形態論、言語の類型、語彙と文法、統語論、ジャンル分析等について講義を行う。	
	言語学２	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、語彙の意味論、意味と比喩、言語変種、言語の変化、言語獲得論、言語教育の前提、言語能力の評価、言語と人間性等について講義する。	
	言葉の思想	これは言語学の講義ではない。言語学は、言ってみれば、通時的或いは共時的に言葉を採集し標本化して、これを観察分類系統づけを行う。ここでは、言葉は死物である。言葉自身の抜け殻である。この講義は、「生」きた言葉を扱う。しかし社会的に「活」用されていればそれで生きた言葉ではない。むしろ言葉の発「生」の現場に立ち会おうとする講義である。と言ってもホモ・サピエンスの登場するはるか昔のことのことではない。今ここにたち現れる言葉について考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	科学コミュニケーション論	科学コミュニケーションは、一般に「研究者、メディア、一般市民、科学技術理解増進活動担当者、行政当局間等の情報交換と意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動」ととらえられている。本講義は、大学生の科学リテラシー向上を図るための教養教育の一科目として新規に開講するものであるが、狭義の「科学コミュニケーション」にとらわれることなく、人間以外の生物間コミュニケーションにおける“ことば”、人間と植物・微生物のコミュニケーション産物としての“うつくしさと文化”も主要テーマとして論じる。	
	映画と音楽で学ぶ英語	本授業の目的は、英語への興味関心を喚起し、英語学習への意欲を高めることである。学習者の多くが最も興味を持つ文化的分野として、音楽、スポーツ、アート等があるが、映画の中にはこれらの多様な文化が混在している。本授業は、特に映画のシナリオ（英語の会話）と音楽（英語の歌詞）の理解を通して、英語による表現法と様々な英語圏の文化とを学ぶ。映画と音楽が持つ、「人の心に訴える力」を牽引力に、学習者が英語を学ぶ魅力を十分に実感し、これを機に、積極的に英語に取り組むようになることを期待する。	
	異文化体験	The purpose of this course is to prepare students for study trips abroad. It is expected that students taking this course will be studying abroad at one of Meisei’s affiliated Universities at some time during the current academic year. The emphasis will be on developing coping strategies for living and functioning safely in a different culture where the language of communication is English. English will be the medium of instruction and such topics as Travel Information; Useful English for travel; Homestays; Comparative cultures and customs; Travel Documents; Insurance, health and safety will be covered. Students will be assessed on their participation, degree of understanding and preparation, and the successful completion of the study trip abroad. 本講義は学生の海外研修旅行の準備を目的とする。受講者は研修旅行出発前に、異文化社会でのさまざまな場面における英語での対応や対処の仕方を学ぶ。講義は英語で行い、海外渡航及び滞在に必要な事柄についての知識、情報を得る機会とする。受講態度と講義内容の習得、及び研修旅行への参加により評価される。	
	異文化で学ぶ英語	「言葉は文化である」と言われる。言葉と文化は一体なのか。分離することはできるのか。教養外国語への導入として、この科目では異文化をテーマにこの問題を追究ながら、英語という言語文化に迫る。言語は文化理解なしには解読することはできない。講義では、先ず、英語文化圏の生活文化を中心に探訪をする。主要な民族言語として英語が話される地域の衣食住について学び、英語文化を理解する。次に、異文化としての英語を探求する。日本語と対照しながら身の回りの言語事実から言葉のおもしろみを発見し、外国語への誘いとする。	
	外国語（英語）３Ａ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語３Ａは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（英語）３Ｂ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語３Ｂは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を発展させていく自律性が求められる。	
	外国語（英語）４Ａ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語４Ａは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、３Ａの内容をさらに発展させ、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	
	外国語（英語）４Ｂ	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、３年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語４Ｂは、４技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、３Ｂの内容をさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を発展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語）３Ａ	３Ａの履修者は既に１Ａ・２Ａを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けることもねらいとしたい。同４Ａもこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語）３Ｂ	３Ｂの履修者は既に１Ｂ・２Ｂを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心である。さまざまな読み物が教材となりうる。３Ａよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。同４Ｂについてもその延長上にある。	
	外国語（ドイツ語）４Ａ	４Ａの履修者は既に３Ａを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けること、表現することもねらいとしたい。またこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語）４Ｂ	４Ｂの履修者は既に３Ｂを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心であり、さまざまな読み物が教材となりうる。さらに「話せるドイツ語」もテーマとしたい。４Ａよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。	
	外国語（フランス語）３Ａ	１年次に学んだ１・２の初級の学習を基礎にして中級レベル前半の文法学習に入ります。１・２と同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（フランス語）３Ｂ	語学＋フランス文化。１・２Bの続きです。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（フランス語）４Ａ	これまでの学習を基礎にして中級レベル後半の文法学習に入ります。１・２・３Aと同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。	
	外国語（フランス語）４Ｂ	語学＋フランス文化。１・２・３Bの続きであり、その発展です。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（中国語）３Ａ	中国語２Ａで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、３回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験４級から３級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）３Ｂ	中国語２Ｂで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、３回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験４級から３級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）４Ａ	中国語３Ａで学んだ中国語を復習しながら、初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができる。授業計画としては、３回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験４級から３級レベルに到達できるようにする。常用語は1000～2000による中国語複文の日本語訳と中国語訳ができる	
	外国語（中国語）４Ｂ	中国語３Ｂで学んだ中国語を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができることを目標とする。授業計画としては、３回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験３級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（韓国語）３Ａ	１Ａ、１Ｂ、２Ａ、２Ｂを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語３Ａにおいては日本語話者教員を配置して文法事項の説明および練習問題等に比重を置く。既に基本的な文法事項は習得されているはずであるから、ここでは初級韓国語学習で最後に残された重要文法事項である連体形を中心に、練習を繰り返して定着を図る。もちろん、３Ｂ担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（韓国語）３B	１A、１B、２A、２Bを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語３Bにおいては韓国語話者教員を配置してある程度の会話訓練も授業に取り入れる。学習が二年目に入っている学生が基本的な対象であるので、韓国語のみならず、韓国・朝鮮文化への関心を維持させる上でも会話能力を磨くことは有益である。もちろん、３A担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	
	外国語（韓国語）４A	基本的には日本語話者教員を配置して３Aから継続して教科書を進めていくが、教科書を終わらせることを目的とはしない。一般に二年次用の韓国語教科書は後半に入るに従って日常会話で使われる表現を多く取り入れる傾向があるが、未だ基盤が未熟な段階で高度な会話形を教えていくことにはあまり意味がないので、韓国語の基礎段階として必須の文法事項習得を終えた段階で、その韓国語能力をもって読解可能な文章を辞書を使って読むことに重点を移していく。それが結局は、会話形も含めた韓国語能力全般の底上げにつながると考える。なお、基礎的な会話訓練は４Bにおいて行うこととなる。	
	外国語（韓国語）４B	韓国語話者教員を配置して、プリント等の教材を使用して主に会話訓練を行うが、４Aの進捗状況を確認しつつ、使用可能な文法事項を増やしていく。その際、あまり高度な会話形を追求するのではなく、もっとも基本的な形を確実に身につけられるように指導する。往々にして、「生きた韓国語」のスローガンのもと、学生の処理能力を超えるような会話形を教えるケースがあるが、既修文法レベルがさして高度ではなく、またその定着も十分ではない状況においては逆効果である。	
	日本語３A	この授業では既習の日本語表現を確認し、より論理的な文章を書く方法を提示する。文体によってことばの選び方や文末表現が違うので、教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。いろいろな書きことばの文体を学んだ後、物事の前後関係、仕組み・手順・方法、因果関係、行為の理由・目的、物事間の共通点・相違点、伝聞・引用などを表す表現を取り上げ、作文の練習をするというスタイルで授業を進める。	
	日本語３B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。後半に話しことばと似た性格を持つ電子メールの練習をして、両者の共通点と相違点を認識してもらうことを目標とする。授業は、まず話し言葉の特徴を考え、その後日本語の改まり度や敬意表現、伝言、勧誘、許可、情報の提示、依頼、申し出などの機能を担う表現を取り上げ、ロールプレイやディベートといった形でそれらの表現を含む会話練習をする。さらに、会話と電子メールの共通点と相違点を検討し、電子メール表現の特質を考える。	
	日本語４A	この授業ではより論理的な文章を書く方法を提示する。教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。また、自分の意見と、参考にした文章との違いを明確に書き分けられることを目標とする。自分の考えを述べ、物事の変化・推移、賛成意見・反対意見などを表す表現を取り上げ、作文の練習もする。さらに、テーマと目的やアウトラインを考え、情報を整理して、レポートにまとめるというスタイルで授業を進める。	
	日本語４B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。また、文章をもとに、プレゼンテーションをする力を身につけることも目標とする。授業ではまず、不満・言い訳、提案、感想表現といった対人関係を考えた基本的な会話表現を練習する。その後、電子メールと手紙の共通点と相違点を考える。後半ではインタビューとそのまとめ、発表の練習をし、さらに実際にインタビューによる調査とそのプレゼンテーションを行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級英語１	英語１及び英語２で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、４技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。１では、それに必要な基本的な語彙、フレーズを学ぶ。	
	上級英語２	英語１及び英語２で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、４技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。２では１に続いて、表現や伝達に必要な基本的な語彙、フレーズの学習をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語１	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、という人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひとも、「ドイツ語技能検定試験」（独検）という５級～１級までのものとか、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級ドイツ語２	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひとも、「ドイツ語技能検定試験」（独検）という５級～１級までのものとか、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級フランス語１	フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD,CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語２	既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト（新聞・書物等）を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス語世界の具体相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語１	上級中国語１を学習することによって、中国語検定試験４級～３級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語２へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級中国語２	上級中国語１から、段階的に学習することによって、中国語検定試験３級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語２へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	
	上級韓国語１	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、語彙、文法、表現の増強を図り、実践的に表現しうる能力を養う。用言の活用の様々なタイプに習熟し、話しことばと書きことば、敬意体と非敬意体、連体形や接続形、引用形などの様々な文法を学ぶ。加えて、基礎的な語彙力の拡充をはかり、「電話の表現」、「感謝を表す」、「許可を得る」、「提案する」、「意志を述べる」といった、より洗練された談話表現の獲得にも力を注ぎ、実践的な表現力を増強する。	
	上級韓国語２	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、会話力と作文力を実践的な練習を通して身につける。まず、発音の練習を徹底して繰り返す。次に、会話における「場」の重要性を認識し、いつ、どこで、誰と、何を、どのように、なぜ、言葉を用いて話すのか常に意識し、やり取りする練習を行う。また、自分の考えや感想を韓国語の自然な表現で表し、まとめる力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験３・４級合格を目指し、試験対策も行う。	
	上級英語３	英語１及び英語２で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、４技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。３では、１，２で学んだ表現方法を使って、様々なテーマのもとに、自己表現活動、伝達活動の実践をする。	
	上級英語４	英語１及び英語２で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、４技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。４では、３に続いて、実践活動をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語３	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。上級ドイツ語３では同１・２の内容をさらに発展させて展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひとも、「ドイツ語技能検定試験」（独検）という５級～１級までのものとか、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級ドイツ語４	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。上級ドイツ語４では同３の内容を受けて講義を展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひとも、「ドイツ語技能検定試験」（独検）という５級～１級までのものとか、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級フランス語３	「上級フランス語１」に続いて、フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD，CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語４	「上級フランス語２」に続いて、既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト（新聞・書物等）を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス 語世界の具体相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語３	上級中国語３を学習することによって、中国語検定試験３級～２級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級中国語４	上級中国語３から、段階的に上級中国語４を学習することによって、中国語検定試験２級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。主として、中国の新聞や映画なども「見て、聞いて」自然に分かるようにします。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級韓国語３	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語表現力を養うことを学習目標とする。日本語と韓国語の対照言語学的な観点も考慮にいれ、両言語の類似点と相違点に気付き、さらに直訳では不自然な、高度な表現の習得にも力を注ぐ。また、韓国で出版された小説、童話、詩集、新聞記事等を教材とし、豊かな表現の学習とともに、そこに反映されている韓国文化や価値観、考え方等を知り、理解することを目指す。	
	上級韓国語４	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語でのコミュニケーション能力を養うことを学習目標とする。まず、聞き取りや会話練習に重点を置き、映画やドラマ等を題材にし、さまざまな表現を学び、応用できる練習を行う。また、日記や感想文を課題にし、自分の考えや主張等を効果的に伝えるための文章力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験２・準２級合格を目指し、試験対策も行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本事情１	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要だと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では日本の風土、芸術文化、娯楽、家族・人生観、大学生生活、衣食住文化等をテーマとして取り上げる。	
	日本事情２	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要だと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では労働・産業構造、技術革新、教育、交通・物流、コンビニエンス・ストアなどの業態、コミュニケーションの様々な形態等をテーマとして取り上げる。	
	外国事情１	明治維新以後、日本の近代化に多大な影響を及ぼしたのはヨーロッパ諸国であった。講義では、ペローの童話(シンデレラ)を取り上げ、そこに描かれる家族像から、ヨーロッパ近代社会を支える「家族」の意味を考え、ヨーロッパの文化・精神性への理解を深める。具体的には、ヨーロッパの地理や歴史、伝承文学、原作者ペローの紹介、夫婦と子どもの位置関係、家族内のいじめ、母親と父親の役割、日本の昔話との関係、ヨーロッパにおける精神性の基盤、ヨーロッパの昔話における「家族」の特徴等の順序で講義を行う。	
	外国事情２	アメリカ合衆国は、今日世界最大国であり、世界に対する影響は絶大であり、日本にとって最も親密な国であり、アメリカの知識は不透明な21世紀において日本の将来を考える際に大いに参考となろう。講義では、第一に今日のアメリカを理解する上で必要な基礎知識、すなわち、日米関係、アメリカ合衆国成立の経緯（歴史）、地理、人種・民族、政治、文化(文学をも含め)等、様々な分野の基礎知識を身につけ、次にこれらの知識を利用して、現代日本をアメリカと比較して検討するという視点を養うことが目的とする。	
	日本の文学１	最も好事家的な学問であると思われがちな文学を単なる教養ではなく、社会批評の学問として再認識する。「詩」や「物語」という概念を拡張し、社会の様々な物語の存在に気づくことが出来、かつそれらに批評的な視点を持つ方法を有する。授業では、日本近代「文学」研究の誕生、 作家論・「作家」をめぐる物語、作品論・研究としての文学、テクスト論・研究から再び批評へ、 実証研究の意義・文学の基礎、 読者論・様々なレベルの読者、 サブカルチャーとメインカルチャー、「文学史」をめぐる物語等のテーマについて講義を行う。	
	日本の文学２	文学を読むことと文学を研究することは違う。文学は、作品を読み、時代や文壇のことを調べ、作家の意図をさぐる単なる謎解きでもない。今や文学だって単なる好事家的な営為とは違う段階に来ている。文学史の再教育としてではなく、文学を研究する方法を講義することによって、単なる文化的教養ではなく、新たな思考法の獲得の機会とすることを目指す。具体的には、文学を物語と考え、社会の多くの言説がその構造に支えられているということを知り、如何に物語に批評的な立場を取りうるかという方法の獲得を目指す。講義のテーマは、モダンとポストモダン、批評から研究へ等である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国の文学１	外国文学を原著で読むことで翻訳では感じるのが難しい文化的背景や語感等を把握することを目的とする。「ハリー・ポッターと賢者の石」（シリーズ第一巻）を購読する。映画や翻訳などでストーリーになじみのある児童文学ではあるが、イギリスの子供たちにとって大前提となっている文化的事実など、異文化理解のために学ぶべきことがたくさんある。講義では原文（英語）を丁寧に読みながら、言葉の面白さにも注目し、原文の持つ響きを理解することを説明する。	
	外国の文学２	この授業では以下のことを到達目標とする。（１）外国文学を原書で読むことに親しむ。（２）必要以上に日本語に頼らずに英文を理解する。（３）文学作品の社会的・文化的背景を理解する。（４）言葉の面白さを楽しむ。講義では、ロアルド・ダールの「チャーリーとチョコレート工場」を、次には同じくダールの短編小説を講読します。ダールの優れた人間観察力から描き出される筆致には引き込まれるものがある。講義では原文（英語）を丁寧に読みながら、言葉の面白さやイギリスの文化を理解する上で欠かせない知識などを学ぶことを説明する。	
	文化人類学１	異文化理解の学問として始まった文化人類学の概要を学説史をたどることによって理解する。文化人類学の特徴は西欧にとって異質な社会を対象とした研究だけではなく、人間の全活動を文化として総体的に理解しようとしたことにある。そのような文化人類学の考え方を、啓蒙期から進化主義の人類学、機能主義人類学、構造主義人類学、象徴主義人類学、解釈人類学とたどっていくことで明らかにする。現代の社会における文化人類学の果たすべき役割も重要なテーマである。	
	文化人類学２	文化人類学１で学んだ基本的な考え方をふまえて、文化人類学が扱う個別のテーマについて共に考えてみる。扱われる問題は、家族と親族、結婚、ジェンダー、宗教、ナショナリズム、グローバリズムなど多岐にわたるが、そのうちのいくつかが選ばれ解説され、学生自身の問題として討論されることになるだろう。身近な問題を通して世界をどう捉えることができるかを学生に認識させることが目標となる。自身が社会や世界とどのようにつながっているかを考えることにより、自身への理解が深まることを期待している。	
	人文科学論１	人文科学とは、辞書的には「人類の文化についての諸学問」と規定される。ここでの「文化」は、一般的に理解されている芸術文化という意味だけではなく、人類の生活様式・思考様式全般にまで及ぶ。この講義では、人類の諸文化を明らかにする切り口を設定し、人類の文化について多角的な面から考察し、いわゆる「現代社会」そのものを相対化できる、柔軟な思考力を身につけることを目指す。	
	人文科学論２	日本だけでなく、世界的に見ても上演頻度の高いシェイクスピアの戯曲は、単にイギリスの文学･演劇であるにとどまらず、全世界で数世紀にわたり受容され、演劇のみならず、オペラ、バレー、映画でも、シェイクスピア戯曲は表現されてきた。ドイツ、ロシアでも、シェイクスピアは数世紀にわたり、ほとんど自国の作品として受容されており、また日本では歌舞伎、能狂言の形でも改作されている。いまや世界文化ともいえるシェイクスピア文化を、英文学の枠外から見直し、日本を始めとして各国の（演劇）文化にシェイクスピアがどのような衝撃を与えたかを観ていきたい。	
	日本史１	最近の日本史研究の進展により、日本史を日本列島だけで考えることではすまなくなってきた。日本列島とユーラシア大陸、その他の諸地域との国際関係・国際交流が重視されているのである。中学校・高等学校の日本史教科書もそのような視点で書かれるようになってきた。本講義ではアジアからみる日本史として、前近代社会を中心に、古代の大陸との外交、中世の国際関係、鎖国下での国際関係等をテーマとし、日本とそれを取り巻く国際社会について歴史的に考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本史２	日本史１をうける形で、明治期以降の日本の対東アジア外交史を扱う。まず、伝統的な東アジア朝貢貿易システムを西洋型の万国公法体制に転換させようとする明治政府の基本的外交方針を確認し、その具体的発現形態としての対朝鮮、対中国外交を概観する。それを通して、近代日本が帝国主義時代を帝国主義国として生き抜くことを決断した時点で不可避的に東アジアへの抑圧を伴わざるをえなかったことを示し、未来の対東アジア関係について考えさせる契機とする。	
	西洋の歴史と文化１	＜キリスト教を通して知るヨーロッパ史１＞キリスト教の発展と密接な関係を持っているヨーロッパの歴史をよく理解する為にはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずイエス・キリストが生まれた時代のユダヤの状況を理解するためにメソポタミア時代からユダヤ王国建国、ローマ帝国による支配にいたるユダヤ民族の歴史とユダヤ教を概説し、その上で、イエス誕生の経緯と新約聖書に見られるイエスの言動を通しキリスト教の基礎的教義と古代キリスト教会の歴史を概説する。	
	西洋の歴史と文化２	＜キリスト教を通して知るヨーロッパ史２＞　ヨーロッパの歴史はキリスト教の発展と密接な関係を持っているので、ヨーロッパをよく理解する為にはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずキリスト教の基礎的知識を明らかにし、中世ヨーロッパ社会にキリスト教がどのように浸透したか、また、ローマ・カトリック教会がいかなる社会的勢力となったか等の問題を検討し、中世ヨーロッパ社会の特質を概説する。次に近代初頭のマルティン・ルターの宗教改革の原因と社会に対するその影響を概説する。	
	中国の歴史と文化１	＜漢字の変遷と中国の歴史＞東アジア社会では、民族と国家がそれぞれであるが、その共通性を追求すれば、漢字はその一つである。講義では、東アジアにおける共通した漢字を軸に、その歴史をさかのぼって、文化理解を深めることを目指すが、まず漢字の起源を甲骨文字まで遡り、次に史上の「六書」における漢字の変遷、秦始皇帝による漢字統一や書体の変化を、また墨や紙等、漢字の書写道具と材料の変化を明らかにし、漢字の発展が中国の歴史と文化にどのような影響を与えたかを考察する。	
	中国の歴史と文化２	＜漢字の変遷と中国文化・日本文化＞　東アジア社会の共通性を追求すれば、漢字はその一つである。横文字の世界に対して、こうした共通の漢字文化は東アジアを繋ぐ一つの絆になった。東洋史の一側面として、その漢字の今昔及び各地域での様相を考察することは、まさに近年以来大いに騒がれる東アジア共同体構築の基盤を理解することとなろう。講義では、西夏文字等漢字の派生文字の歴史、さらには日本字における漢字の由来等を検討することによって、中国文化と日本文化等の関連性を明らかにする。	
	考古学１	考古学という学問の概説をおこない、学問の基礎的な考え方を学ぶ。先史人類の生活と文化の変遷を学ぶことによって人類と文化の発達の意味、人類と環境の関係について考える。これによって自己存在の位置づけを認識する一助とし、また過去を糧として現在と未来の生活指針を設計する態度が身につけられるであろう。講義と共に、遺跡や遺物も視覚的に捉えていく。学生にはその背後にある人間についていかに考えるかが課題として与えられるであろう。	
	考古学２	考古学１を踏まえて考古学がどのように人間の歴史を理解しているかについて考える。考古学は先史文化の学問であるばかりではなく、無文字社会の歴史を理解する上でも欠かせない。幾つかの無文字社会を扱い、文化の発達と衰退について学ぶことによって、人類と環境との関係、現代と未来の人間社会について考察することを目標とする。過去を現在の自分自身に投影することによって、将来の生活指針を設計することができることを学ぶことが出来るであろう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本の芸能１	日本には様々な芸能が存在している。民間でおこなわれてきた様々な芸能は現在でも年中行事などと深く結びついておこなわれてきている。近世になると民間の芸能が民衆を対象とする職として成立してきた。その一つが落語である。この講義では「上方落語」に焦点を当ててみる。落語の言葉は、生きた古語とも言うべきもので、落語に親しむことによって他の日本の伝統芸能、人形浄瑠璃文楽や歌舞伎などへの関心も生まれていく。広い視点から落語を日本の伝統文化の中に位置づけたい。	
	日本の芸能２	日本が世界に誇る伝統芸能の一つとして人形浄瑠璃文楽がある。歌舞伎などとも関係が深いこの人形浄瑠璃文楽の歴史、特徴について知ることによってまた歌舞伎などの伝統芸能への関心も生まれてくるだろう。講義では概説の後に、具体的な例として作品を取り上げる。台本の購読・解説をおこなうので古文に慣れ親しむきっかけにもなる。音源資料や映像資料を使って人形浄瑠璃文楽の実際のあり方についても解説をおこなう。能や狂言、歌舞伎などといった舞台芸能についても人形浄瑠璃文楽と共に考えてみたい。また学生が関心を持ち、伝統芸能の公演に触れるようになることが期待される。	
	日本民俗学１	日本民俗学は近代日本の学問の中においては西欧化の輸入ではない日本独自のものとして形成されてきた点で特異である。それは何よりも近代日本におけるアイデンティティの問い直しであった。その学問形成歴史を踏まえながら、日本民俗学が関心を寄せてきた日本の生活文化について講義をおこなう。生活文化を考える際には社会（人間関係）の分析が重要であることを認識したい。沖縄文化の解説をおこないながら学生には自分たちの周囲の生活文化を考えていくきっかけを与えたい。	
	日本民俗学２	柳田國男によって創始された日本民俗学は、何よりも現実を直視することにあった。身の回りの常識を疑い、その意味を探ることにその本質はあったともいえる。そのような日本民俗学の成果を踏まえながら、我々の生活文化の再検討をおこなうことを目標とする。親子関係、婚姻関係、ジェンダーとセクシュアリティー、老い、生活革命、年中行事の変化、伝統文化の作られ方などが問題となるであろう。近年の日本民俗学の新しい展開を踏まえながら、これらの問題について概説をおこなう。学生は感心に合わせて身の回りの生活文化に関するレポートを作成する。	
	自然科学史	「顕微鏡」といえば、肉眼ではみにくいものを拡大して観察することができる道具として、ほとんどの方がプラスのイメージを持つであろう。しかし、17世紀におけるその普及が、実は発生学の分野においては後退を招くものであったという事実は広く知られていない。本講義では、博物誌と生命論、不老不死思想と錬金術の関係、原子論と分子論、周期表の誕生、分類学と進化論、自然発生説等を題材に、科学の光と影、失敗と成功の「おもしろさ」を味わいながら、科学とは何かを改めてとらえ直してほしい。	
	図像学	美術作品といわれるものの中でも、文化や宗教の違う国の作品や、日本でも古い時代の作品には、予備知識なしに見ただけでは理解できないものもある。そこでこの授業では、西洋･東洋の宗教絵画・物語絵画の意味を、ギリシャ神話･聖書･仏伝･日本の伝説や物語などを通じて学ぶ。その姿や場面の意味するものや、物語の内容を知ることによって、個々の絵画を理解するのみならず、各国の物語や神話を比較しつつ鑑賞することにより、多様な文化への興味を深めることも期待される。	
	人文科学論３	日本文化論・日本人論というのは、ブームになっている。その論点は、日本文化や日本人の独自性・特殊性を論ずるものが多いようである。しかし文化は、相互交流の中から生まれ、そこには独自性とともに普遍性も存在するといえる。この講義では、いわゆる「日本文化」を対象にして、文化の持つ特殊性と普遍性の問題について考える。具体的には、福沢諭吉・柳田国男等、「日本文化」に関わるいくつかの言説について紹介しながら検討する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	人文科学論４	日本の列島社会やそれをとりまく地域の中にはさまざまな文化圏が存在している。いわゆる日本文化は、そのような文化との影響を受け、さらには相互交流・受容の中から生み出されたものということができる。本講義では、列島をとりまく文化圏と日本文化との関わりについて、具体的な事例から考えたい。縄文文化と弥生文化、山の文化と海の文化、琉球文化とアイヌ文化、中国・朝鮮文化と日本文化、ヨーロッパ文化と日本文化等をテーマにして学ぶ。	
	日本史３	高校まで学んだ知識を再確認しながら、19世紀後半、すなわち幕末維新期以降の日本が歩んだ歴史を概観していく。特に、欧米諸国なみの近代国家建設を目指した日本が、いかなる葛藤や矛盾をみせながら、新たな社会を形成していったのか、政治経済面、対外問題、戦争を中心にいくつかの事例をとりあげて講義する。そのうえで、高校までに学んだ歴史の知識と、実際に語られる歴史の差異をいかに把握すべきか、受講者とともに考えてみたい。	
	日本史４	高校までの日本史は、政治面を中心にしながら主に国家の歩みを教える内容といえる。その一方で歴史を形作るのは、いつの時代であろうと、人やモノの移動・交流がおりなした所産にほかならない。そうした、高校までは詳しく教えられることのなかった歴史のうち、世界規模での移動・交流が盛んになった近代の日本を舞台としながら講義していく。また、近代的価値観を求められた激変の時代のなかで、人びとはいかなる価値観をいだいていたのか、モノの交流がいかに社会を変貌させていったのかについても注目して講義してみたい。	
	社会の仕組みと人間の営み１	この科目では社会学的なものの見方や考え方を学んでいくことを第１の目的とする。日常生活において当たり前すぎて気にもとめない、私たち自身の行為や他の人々との関係のあり方、あるいは、私たちを取り巻く様々な社会の制度について取り上げ、それらがどのような意味をもつのかを考える。具体的には、社会学とはどんな学問か、私と社会、アイデンティティ、国民であること、エスニシティ、エスニック・スクール、関係を築く、地域社会とエスニシティを取り上げる。	
	社会の仕組みと人間の営み２	社会学的なものの見方や考え方を身につけながら、私たちを取り巻く社会がどのような仕組みをもち、そのなかで私たちがどのように生きているのかを考える機会としたい。本科目では、具体的に次の内容になる。はじめに、社会制度のなかにおける教育と学校について考察し、その中で外国人児童生徒問題を取り上げる。さらに、集りのなかにおける個人と集団というテーマについて考え、現代社会全般について考察を発展させる。	
	法学１	本科目は法学を専門としない学生を対象として、法の基本的な知識を習得させることを目標とする。それゆえ最初に我々の通常の生活に存在する法を指摘し、社会における法の役割を考え理解する。その次に、法と他の社会規範との比較、法の効力の範囲、法の分類、法的関係としての権利と義務、法の適用と解釈等の課題を通じて法を多角的視点から学んでいく。	
	法学２（日本国憲法）	本科目は法学を専門としない学生に、最高法規である日本国憲法の基本原理を理解させることを目標とする。最初に憲法を理解するために憲法の概念、近代憲法の原則等の基本を論じる。次に日本国憲法の原理を明らかにし、平和主義の理念、統治組織としての国会、内閣、裁判所の各々の性格と権能、人権保障の意義と種類等を学んでいく。尚、法学２に入る前に、法学１の知識を習得しておくことが望ましい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	現代政治を読み解く１	若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。 「現代政治を読み解く１」では、そのような観点から、憲法９条の問題や日本の国際貢献、自衛隊のＰＫＯ参加など、重要な政治的テーマを取り上げ、その背景にさかのぼって詳しく解説を行う。	
	現代政治を読み解く２	若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。 「現代政治を読み解く２」では、今日の政治状況を考えたときに、欠かすことができないと考えられるテロリズムの問題、そして日本の安全保障の問題を特に取り上げ、詳しく解説を行う。	
	社会科学論１	社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。 「社会科学論１」では国家の役割や民主主義の歴史と概念、アメリカやイギリスの政治制度、さらにはエネルギー問題などを取り上げる。	
	社会科学論２	社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。 「社会科学論２」では、各国の選挙制度、日本国憲法、人権問題、地球環境問題などを扱う。現代社会が直面する様々な問題への関心を深め、学生が自分なりの見方や考察ができるようになるのが、本講座の重要な目的である。	
	国際関係論１	世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。 「国際関係論１」では、まず基礎固めの意味で、国際社会の生成と仕組みを詳しく学習し、その後、国際連盟、国際連合、その他国際機関の活動、国連平和維持活動（ＰＫＯ）、日本の政府開発援助（ＯＤＡ）などの重要事項について扱うことになる。 また必要に応じて、最新の世界情勢に関する解説も行う。	
	国際関係論２	世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。 「国際関係論２」では、戦後の国際社会の歴史を取り扱う。すなわち冷戦の開始から終結にかけての流れを詳しく学習し、さらに冷戦後の混沌とした世界情勢についての解説を行う。国際社会がこれまで歩んできた歴史をきちんと学習してこそ、今日の世界情勢への理解も深まると考えられる。	
	２１世紀経済への視点１	21世紀を迎えた今日、日本はずいぶん豊かになったはずだが、暮らし向きはむしろ厳しくなってきた。なぜなのだろうか。経済格差や人口の減少も問題になっている。われわれの暮らしはこれからどうなっていくのだろうか。経済学の基礎知識を利用しながらこんな疑問に答えていく。具体的には、マクロ経済主体の結びつきと国民所得、家計、企業、政府、外国、グローバル化の波、国民所得、金融・財政政策、マーケットにおける価格の決定、消費者の合理的行動、生産者の合理的行動、市場メカニズム、競争の利益と不利益を取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	２１世紀経済への視点２	本科目の目標は、日本経済の流れを考えつつ、身近な経済現象などについて知り、そして、本当の暮らしの豊かさ貧しさについて考えることである。具体的には、経済と経済観の変遷、高度経済成長、豊かな社会、モノの豊かさよりも心の豊かさを、国債の大量発行問題、、自由化への動き、規制緩和と構造改革、失われた１０（１５）年、少子高齢社会の恐怖、産業資本主義からポスト産業資本主義へ、家庭を取り巻く経済環境の変化、円高・円安の不思議（円高で得する人と困る人）、消費と貯蓄（ミクロの考え方とマクロの考え方）を取り上げる。	
	グローバル時代の経営１	企業経営活動は生産活動である。それは利潤の生産と財やサービスといった商品を生産する。その生産過程では、生活の糧を提供したり、人々の「豊かさの創造」機会を生み出したりもする。企業が存続するためには、利潤達成と同時に、社会的責任の遂行がなされなければならない。具体的には、経営学とは何か、企業の基本的な特質、企業形態、株式会社制度の特質、企業集団、コーポレート・ガバナンス、企業経営とステークホルダー、中小企業論、非営利組織論等を取り扱う。	
	グローバル時代の経営２	経営学を幅広く理解することと現実の企業経営における諸問題を整理し、考察するための方法論を学ぶ。本講義では、こうした観点に立って企業経営を考えるとともに、グローバル時代における経営戦略という視点を導入する。具体的には、経営学史を学ぶ、科学的管理法、科学的管理法の深化、管理過程論と管理原則論、人間関係論、現代組織論の源流、環境適応理論、経営戦略論、人的資源間理論、日本的経営論、国際経営、環境経営、ＣＳＲと企業倫理という個別テーマを取り上げ、話題を展開する。	
	情報社会文化論１	文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。とくに本科目では、情報の意味について理解することからはじめ、量として測れることを知る。ひるがえって、遺伝子情報、人間の記憶能力、文明の発祥と文字の発明、粘土板・パピルス・紙といった記録媒体、社会的記憶装置である図書館などについて、古代からギリシア時代あたりまでを概括する。歴史の発展、文化・文明の展開を「情報」という視点から見る「情報史観」を導入する。	
	情報社会文化論２	文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。紙の発明は人類に何をもたらしたか、同様に、印刷術の普及はどうであったか、また、レコードやフィルムといった音声・画像・映像などの情報メディアが社会や文化にどのような影響を及ぼし変革をもたらしたのかについて学ぶ。さらに、数表、計算する道具、電子計算機など、情報社会を形作ってきた事物・事象の生成・展開について、原動力となった要因を社会的・歴史的・文化的背景を踏まえて概説する。	
	生涯学習論１	生涯学習時代といわれて久しいが、この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、生涯学習・生涯教育論の展開と学習の実際、生涯学習社会における家庭教育・学校教育・社会教育の役割と連携、生涯学習振興施策の立案と推進、教育の原理とわが国における社会教育の意義・発展・特質等を取り上げる。	
	生涯学習論２	この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、社会教育行政の意義・役割と一般行政との連携、自治体の行財政制度と教育関連法規、社会教育の内容・方法・形態（学習情報の提供と学習相談、評価を含む）、学習への支援と学習成果の評価と活用、社会教育施設・生涯学習関連施設の管理・運営と連携、社会教育指導者の役割を取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	図書館の基礎と展望	図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。具体的には、図書館の現状と動向、図書館の構成要素と機能、図書館の社会的意義、知的自由と図書館、図書館略史、公立図書館の成立と展開、館種別図書館と利用者のニーズ、図書館職員の役割と資格、図書館の類縁機関・関係団体、図書館の課題と展望などを取り上げる。	
	社会に生きる私たちの人権	「人権」という言葉を辞書で引くと「人間が、人間として当然に持っているとされる権利。基本的人権。」とある。この権利は、わが国では日本国憲法によってすべての国民に保障されているのだが、果たしてどうであろうか。わが国の歴史のなかには、多くの差別の事例が見られる。また、世界を見渡せば、国や地域によって、必ずしも完全な形で人権が守られているとばかりは言えない状況がある。人権や差別にかかわる思想的・歴史的な経緯を確認しながら、人種・性・障害者などの差別問題、学校・職場におけるハラスメントについて考えていく。	
	女性の生き方	一般に女性論・女性学は、社会的存在としての女性について、その自立などを論じる。だがそれは、自然的存在としての女性を忘れることであってはならないだろう。むしろ社会的存在としての女性を論ずるためにこそ、社会的及び自然的存在を包括する「自然（ジネン）的存在」としての女性が見られねばならぬ。したがって、女性の生き方と言っても、単に社会の中で女性はいかに生きるかのみを問題とするのではなくむしろ女性の存在を通じて謂わば新たな自然存在論を試みるというのが本講義である。	
	地図を読む	自分の進むべき道を自ら発見し、たくましく生きることの大切さを体験的学習する。「地図」と呼ばれるものには、例えば、国土地理院発行の「地図」や、哲学的な意味での人生の「地図」など、様々なものがある。講義では「地図」という言葉をキーワードに、教科書のみに依存した学習ではなく、人生を歩む上で役立つ実践的な知識も学ぶ。	
	ボランティア論	他人のために自分は何ができるかと考えたことや、他人や社会に役立ちたいと思ったことはないだろうか。社会には援助が必要な人々や無償の労働が必要な分野がたくさん存在する。そこで、ボランティアということを考えてみよう。この科目では、自分のボランティア体験を振り返り、まず、ボランティアという言葉に対する自分のイメージを検証することから始める。そして、ボランティアとは何か、その活動分野、受ける側の考えとニーズの理解、必要な態度とルールの理解、歴史と基本的理念、市民参加の重要性、ＮＰＯとＮＧＯを取り上げる。	
	情報法制論	平成17年４月に完全施行された個人情報保護法をはじめ、情報公開法・著作権法など、情報をめぐる個人・法人の権利の保護に関する法律を中心に、その制定経緯から説き起こし、理論上・実務上の要点を解説する。特に、マスメディアや企業内で活躍する際に特に留意すべき法的争点を取り上げる。具体的には、法律学における「情報」、マスコミ倫理と法制度、「知る権利」、プライバシー保護、コンプライアンス、著作権の歴史、著作権法の基本概念、パブリシティの権利、不正競争防止法・企業秘密、工業所有権法の基礎、ビジネスモデル特許を取り上げる。	
	地球惑星学１	本講義概要は地球惑星科学の基礎を学び理解することである。地球惑星学１では「地球表層、マントル、コアのダイナミクス」すなわち「プレートテクトニクス理論」と「プルームテクトニクス理論」の概要と原理を学ぶ。さらに太陽系誕生のメカニズムと「４６億年前の地球誕生から生命誕生」までをひも解く。講義内容は最新の研究成果及び話題を織り交ぜ解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	地球惑星学２	本講義概要は「４６億年の地球史」を学び、「地震」と「火山」の概要と原理を学ぶ。とくに地球誕生から４６億年かけて形成した気圏、水圏、地圏、生物圏における物質、エネルギー循環とその相互作用について学び、地球を一つのシステムとして捉え、地球環境の変動メカニズムについて理解する。講義内容は最新の研究成果を織り交ぜ解説する。	
	科学技術論１	現代社会における科学技術の発達は目を見はる物があるが、我々はそうした中で社会生活を送らなければならないのも事実である。そこで、科学技術論１では例えば将来必ずや身近な物となるであろう介護用ロボットをはじめとするロボット開発の現状や衝突しない自動車の開発、さらにはリニアモーターカーによる高速鉄道の簡単な原理など、それぞれのテーマに関する最先端技術について正しく理解するための知識を分かりやすく講義する。	
	科学技術論２	科学技術論２では、我々が生活する上で欠かせないエネルギー問題をメインテーマに講義計画を立てており、例えば現在の社会生活において欠かせないエネルギー源である原子力エネルギーの安全性とその重要性について、また、地球外資源の開発と言う観点から国際宇宙ステーションを中心とした宇宙開発の必要性と現状について等より具体的な内容で構成する。我々は好むと好まざるとに係らず最先端科学技術の真っただ中で生活するわけで、それに対する正しい知識を持つきっかけとなればと考えている。	
	統計学１	統計学の本質を出来うる限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば単回帰分析、3つの変量の関係を知る法、正規分布、標準化、Ｚスコア、Ｔスコア、偏差値、五段階評価、統計的仮説検定、平均値の検定。	
	統計学２	統計学の本質を出来うる限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば新旧両製法を比較する法、統計的推定、等分散検定、平均値の差の検定、2つの母集団の異同を判定する法、同一人に2つの処理をした場合の結果の差の判定法、適合度検定。	
	基礎数学１	コンピュータ技術，CD/DVDの読み取り，経済，金融，金利，統計，測量の他，Excelでの処理等，日常生活で数学に関連する事柄は多様である。基礎数学１では，整数，二次方程式と関数の初歩、数列，微分積分の基礎，確率と統計に関する内容を出来るだけ身近な話題と関連づけて扱うことにより，数学の基礎的素養を習得し，問題を論理的に考えられる力を養う。また，いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触れる。	
	基礎数学２	日常生活で数学に関連する事柄は多様である。また、数学は物理学・天文学の問題を解きたいという欲求から発達したという一面も持っている。基礎数学２では，ピタゴラスの定理，直線，平面，円，面積，体積の計算といった幾何学を中心に日常生活と数学に関するトピックを出来るだけ身近な内容と関連づけて扱う。授業を通して，数学の基礎的素養を習得し，問題を論理的に考えられる力を養う。また，いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触る。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	生物学１	本講義では「食と人間」をテーマに、我々の日常生活における様々な要素とその意義をとらえ直すことにより、「生物とは何か」「人間とは何か」「生きるとは何か」を考えることを目標とする。前半では、我々はなぜ食事をとるのか、食べたものはどこに行くのか、人間はなぜ動くのかといった講義を通して「食→からだ、行動」のプロセスを論じる。後半では、生命の起源、生物の変遷、人類の歴史と絡めながら、生態系における人類の「住と食事」を論じる。	
	生物学２	生物の示す多くの現象は「遺伝子」に書き込まれている情報の発現調節に因る所が大である。このことを踏まえて、身近な遺伝現象の調節機構・「遺伝子」の概念・「遺伝子」の実体を理解することを目指す。併せてヒトが現生の生物の中で特別な存在ではないことを理解し、特別な存在である自分を考える基盤を作って欲しい。	
	物理学１	人類は昔から宇宙や自然の本質に大変関心を抱き、自然現象を色々な形で日常生活に採り入れてきた。物理学１では身近な太陽系の中での話題を中心に講義を進める。一見複雑に見え、別々の約束事にしたがっているように見えるさまざまな自然現象が、実はいくつかの基本的な物理法則という約束事で説明出来る事を学習する。また物理学の発展の歴史をたどり、何が原因で何が結果であるか、という因果律を学ぶ事で問題解決に対する取り組み方や論理的なものの考え方を学ぶ。	
	物理学２	銀河系とその外に広がる宇宙の姿、系外惑星の発見と地球外生命に関する話題、20世紀初頭に誕生した相対性理論の世界を紹介する。さらに、ハッブルによる宇宙膨張の発見とビッグバン理論とその観測的証拠である宇宙背景放射の発見とそこから読み解く現在の宇宙の姿を扱う。また、宇宙に存在する様々な物質が究極的にはクォーク等の基本粒子によって作られており、これらが宇宙誕生の際いかに物質が作られてきたのかについても触れる。	
	化学１	現代に生きる者として必要な教養としての以下に示す化学の基礎を身につけることを目標とする。（１）原子の構造について説明できる。（２）元素の種々の性質と原子中の電子配置の関係を説明できる。（３）化学結合の種類や特徴について、結びついている原子やイオンの性質と関連づけて説明することができる。（４）物質を原子、分子、イオンといったものの集合体としてイメージすることができる。（５）化学式・化学反応式の意味を理解し、正しく読み書きができる。	
	化学２	私たちの身のまわりの生活や私たちの体に関わる化学現象、化学技術について理解し、各人が生活の中で化学とつきあうための教養を身につけることを目標とする。生活で使っている製品や私たちの体を構成している物質について、どのような化学的な意味があるのか正しく理解し、（１）私たちがどのようにして金属を利用しているのか、化学的性質に基づいて、（２）私たちの身のまわりの様々な有機化合物について、その性質や用途を化学的に、（３）私たちの体をつくっている物質について理解し、説明できるようになることを目指す。	
	自然科学入門１	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。	
	自然科学入門２	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。なお、自然科学入門Ⅰで取り扱う内容を踏まえて講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	生物学３	「遺伝子」の働きが明らかになる現象の一つが生物の形作りである。動物が示す多様な形を生み出すシステムの実体が多くの遺伝子の発現調節の絡み合いであること、その鍵になる遺伝子が見つかっていることを理解して欲しい。さらには、人類が生物を改変する力を手に入れようとしている今日、生物としての自分の尊さを理解し、これからの充実した人生を紡ぐための礎として欲しい。	
	生物学４	微生物は時に黴菌と呼ばれ、病気や食中毒を引き起こす悪者のイメージがある。しかし、発酵食品をはじめ医薬品、環境修復等さまざまな分野で微生物が利用されている。本講義を通して、微生物の「素晴しさ」「おもしろさ」が伝わる事を期待する。具体的には、「味噌、醤油を考える」「清涼飲料水と微生物」「抗生物質とバイオ医薬品」「微生物でまちづくり」のように、我々の生活、産業、医療・福祉、環境などにおける微生物とその利用例を紹介する。また、組換えDNA技術等の倫理的問題、循環型社会の構築等の資源・環境問題に関して議論する。	
	人類と環境	現代社会において環境問題は避けて通ることの出来ないものの一つとなっている。本講義では一般的に語られる環境問題とは異なり、環境とは何か、人類と環境との関わりとは何かを問い直すことによって環境問題への関心を高めることを目的とする。私たちが暮らす地球環境そのものの理解、生物は如何にして多様な地球環境に適応し多様な地球環境を形成しているかについての理解、人類の様々な環境への適応のやり方、人類社会における環境利用の方法、人類の歴史と環境との関わりの理解などについて授業を行う。	
	特別講義１	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義２	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義３	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義４	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通社会的・職業的自立促進科目	自立と体験３	本授業では、社会人基礎力を身につけることを目的とする。社会人基礎力は、専門知識を活かして社会で活躍できる人になるために必要な力である。本授業の中では、チームでの演習を重ねながら、社会人基礎力を体験的に学ぶ。自分の意見を伝え、チームで話し合いながら、様々な問題解決を体験することにより、問題解決能力・コミュニケーション力を身につけることを目指す。	
	自立と体験４	本授業では、就職力を身につけることを目的とする。就職力とは、これからの就職活動の前提となる意識とスキルである。本授業の中では、「自分」「社会」「仕事」という３つの観点で視野を広げ、チーム活動を通して深く考えることを学んでいく。また、自分を表現し、グループで話し合う体験を重ねながら、コミュニケーションを高めていく。ステップを踏んで一つずつ学びながら、自身のキャリアを自らつくる力を身につけることを目指す。	

別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

授業科目の概要

（デザイン学部　デザイン学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	理論科目	デザイン概論	なぜ人間がデザインを行うのかを、自然界の仕組みに見られる広義のデザインとの関連の中で捉えることから始め、デザインがヒト・コト・モノの関係性や仕組みの構築であることを認識していく。その上で、デザイン分野における「企画」と「表現」の意味やその重要性、及びデザインの仕事の基本的な流れについて理解する。こうした考察を通して、デザイン学部の４年間で何を学び、社会においてそれをどのように活かしていくのか、未来のイメージを描く。	
		色彩学	「情報としての色彩」というテーマで、色彩が日常生活において果たしている様々な役割を機能別に分類・分析し、その重要性を考察したのち、「現象としての色彩」というテーマで、色が見える仕組みや、自然現象の中の色の仕組みを科学的に解説する。次に、基本的な表色系の概念や色彩調和論を紹介しながら、色彩の心理的効果や、目的にかなった配色の方法について考察する。また、文化史的な観点や社会学的な観点からも、色彩を考察する。	
		デザイン史	「デザイン」が、産業革命以降の大量生産、大量消費を目的とした、産業・経済システムの中で、豊かな暮らしや経済状況をもたらすことに寄与し、発展・推移してきた歴史を概観する。また、様々な社会や環境の問題に直面している今日では、デザインの概念も変化しつつあり、視覚的な側面に加えて、ヒト・コト・モノの関係性や仕組みを考えることが求められている。このようなデザインに求められる役割の変化も同時に考察する。	
		美術史概論	西洋美術の流れを中心として、先史時代、古代、中世、近世から現代に至るさまざまな美術作品に触れる。異なる思想のもとに生まれたエジプトや東洋の美術と比較しつつ、作品の背後にある宗教や文化、社会事情を視野に入れ、それらと造形表現が、どのように関係しているのかを学習する。未知の美術作品を理解し、観賞するための足がかりを作る一方で、作品から得たものを、今後の自分の研究にどのように活かしてゆくかを考えさせる。	
		デザイン図学	図学（図法幾何学）とは、空間図形を画面上に、正確な対応関係を有する平面図形として写す方法を研究する学問である。まず、基本的作図を理解した上で、様々な幾何学的曲線の性質と作図法を学ぶ。次に、正投影正視画法の三面図による投影・切断・相貫・展開、平行投影による立体画法、透視投影による立体画法の基本を習得する。またこれらの図形操作の技法を、グラフィックを始めとするデザイン分野に応用する方法について、実例を基に考察する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	理論科目	デザインと人	人は様々な視覚情報を得て生活している。それらの視覚情報に含まれている、形状や色の認知特性を理解して実際のデザインに活かす方法を考える。また、身体と道具や空間などの関係性を考察して、誰もが使いやすく、安全に使えるようにするための「人間工学」や「人間中心設計」の考え方を、様々な企画に応用できるようにする。 （オムニバス方式／全１５回） （112 武者　廣平／７回） 生活する上で、人は視覚情報を必要とするが、そこには形状や色に関する様々な認知特性があり、それらを理解して、デザインに応用する必要がある。具体的な事例を通して学び、実際のデザインに使えるようにする。 （108 細田　彰一／８回） 人の身体特性と空間やモノの関係性を考察して、機能性や安全性に配慮したデザインをするために「人間工学」を学ぶ。また、製品をユーザーとって使いやすくするための総合的な開発プロセスである「人間中心設計」を理解して、使えるようにする。	オムニバス方式
		視覚メディア論	視覚メディアは、文明の発展とともに変遷を遂げてきた。情報の伝達と文化・歴史の関係を見ていくことによって、メディアが果たしてきた役割を理解する。併せて、映像をはじめとする各種のメディアの機能や使用方法、特性などについて学び、メディアを利用する意義と実際について認識する。また情報メディアを活用・利用するにあたって必要なメディアリテラシーを養う。さらにメディアの発展と、デザインやアートとの関係について学ぶ。	
		材料学	様々な造形物を、現実的に生産可能なものとして具体的に企画し、提案できるようになるためには、素材の性質や加工法についての基礎知識を身につける必要がある。金属、木、ガラス、セラミックス、合成樹脂、紙、布、コンクリート等、様々な素材の種類や特性の知識を得るとともに、それらの加工法や表面処理、加工に際しての制約や可能性について学ぶ。また現在注目されている新素材やその可能性についても考察する。	
		デザインと文化	人間の生活様式、衣食住、有形・無形の成果の総体は文化と呼ばれる。デザインは文化から何らかの影響を受け、生み出されたものはまた文化の一部を形成する。例えば日本で食器のデザインを考える際に、「箸」を使い、様々な「器」が並ぶ独特の食文化を考慮せずにデザインは成立しないし、我々は無意識にその影響も受ける。そうして作られた「器」もまた、新しい文化の一部となる。デザインと文化の密接な関係について様々な具体例を通して学ぶ。	
		日本・東洋美術史	日本の美術を、その源流となるインド・中国・朝鮮半島の美術と比較しながら観賞する。異なる国々の美術を身近なものとして捉え、国や地域の特徴を把握する。また日本国内においては、美術作品が、時代の変化や社会と文化の影響をどのように受け、その結果どのような作品が産み出されて来たかを知る。作品を理解し観賞するための手段を学ぶ一方、作品鑑賞から得たものを、今後の自分の研究にどのように活かしてゆくかを考えさせる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	理論科目	マンガ・アニメーション史	現代のマンガやアニメーションなどのメディアの特徴や意義を考えるために、歴史をさかのぼり、それらの根源的な力の成り立ちを検証する。特に、メディアの形式の変遷に注目し、その背景となった社会的、文化的、知覚的な問題を、日本と世界との関連の中で考える。また、作り手の立場から作品の内容や技法、考え方などを歴史的に分析・検討することで、マンガやアニメーションなどの表現力の可能性や問題点を抽出し、考察する。	
		デザインとテクノロジー	デザインにとって科学技術（テクノロジー）は不可分の存在である。科学技術の発達によってデザインの技術や可能性が広がっていった歴史を概説する。一方、テクノロジーを製品や道具に応用する際には、一次的な機能面だけでなく、外見、使い易さ、安全性、環境への配慮等、総合的なデザイン力が必要となる。機能性と信頼性との調和を図りながら、新技術や新素材をデザインに取り入れていくための、様々な手法や実例を紹介する。	
		論考と構成	幅広い領域の文献読解を通して、現代社会における様々な課題や問題について考察を深めながら、論文作成のための調査（文献の活用方法、フィールドリサーチ、データ解析等）、研究（テーマの設定方法、研究領域の広がり、研究の意義等）、執筆（論理構成の方法、論文の作成方法等）の手法を基本から学び、応用していく。また自らの論考をまとめ、プレゼンテーションソフトを使用して与えられた時間内での口頭発表を行う。	
	技術科目	表現基礎実習A（平面構成）	ブラインドウォークを通じて、視覚の重要性を再確認した上で、平面構成について学ぶ。一つの点を画面に配置することから始めて、点の数を増やし、ついで線・面については、明暗や色彩など、要素や次元を徐々に複雑化して平面構成する。鉛筆素描からデジタル画像まで多様な二次元の表現法を知り、与えられたテーマに沿って独自の表現を考える。	
		表現基礎実習B（立体構成）	造形要素としての点・線・面・立体を相互の関係性の中で捉え、要素を「作る」ことによる「正」の立体構成、「消す」ことによる「負」の立体構成、面状の立体と塊状の立体それぞれの特質を活かした立体構成の実習を行う。同時に、一つの形態やモチーフを、より豊かな表現へと展開させていくための様々な方法論を、毎回テーマを設けて分類しながら解説する。	
		表現基礎実習C（イメージ描画）	何かを見て絵に描くだけではなく、意味、観念、物語、感情など、何らかの文脈や意図を絵で表現することの基礎を学ぶ。そのためにまず、描くこと以前に、イメージを見て何かを読み取り、絵の潜在的な力を引き出す実習を行う。その上で、自分の表現すべき意図のために写実性やイリュージョン性などを活用する技法を学ぶ一方、自由な描線や象徴性など、幅の広い表現の可能性を実習で試み、絵を様々な方法で使いこなすための考え方と技術を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	技術科目	表現基礎実習D（デッサン）	あらゆる視覚表現に必要な、描写力の基礎を学ぶ。まず、テーブルに布、幾何形体を置き、輪郭や陰影を観察し、立体と空間を捉えて描く事から始める。次に自分自身を観察し、自画像を描く。応用として人体、風景、動物デッサンを試みる。こうした実習を通して，対象（モチーフ）の持つ、質感や量感、光と影、季節感や気候、時には運動を的確に捉え、様々な視覚表現方法が可能となるようなデッサン力を習得する。	
		表現基礎実習E（レンダリング・モデリング）	デザインアイデアを第三者に正確に伝えるためには、「レンダリング」や「モデル」が極めて有効な手段となる。レンダリングでは、マーカーによる表現技術を身につける。またモデリングでは、図面に基づいた回転体の制作と、クイックモデルによる有機形体の制作を行う。さらに、精細に加工して、美しく塗装仕上げするモデリングの手法を学ぶ。 （オムニバス方式／全１５回） （98 長尾　茂樹／８回） 「レンダリング」では、まず三面図や立体図法を理解して、正確な下描きを作成する。さらに手描きによるレンダリング手法を身につけた上で、イメージ編集ソフトや画像編集ソフトによる色づけなどの技術を習得する。 （69 石井　保幸／７回） 「モデリング」では、図面を基にした回転体モデルを、トリメ箱を使用して作成する。また有機形体を図面化して、それを基に発泡材を切り出し、精細に加工して、美しく塗装仕上げをするまでの過程を、実習を通して学ぶ。	オムニバス方式
		表現基礎実習F（印刷技法）	印刷の歴史及び、凸版、凹版、平版、孔版（シルクスクリーン）等の印刷技術と、高性能プリンタとの違いやそれぞれの特徴について、実習を通して学ぶ。今日最も普及している平版の原理を理解するために、リトグラフによる実制作を行う。またDTP（デスクトップパブリッシング）の行程としての４色分解、入稿、校正について学ぶ。さらにDTPソフトと伝統的な版画技術との関係や高性能プリンタの可能性についても学ぶ。	
		表現基礎実習G（彫塑）	人体の内部構造である骨格や筋肉のしくみを把握しながら、形体の成立について理解することを目的として、美術解剖学の知見に基づいた彫塑実習を行う。頭部や胸部、全身のバランス等人体の形体をよく観察しながら、モデリング素材としての粘土を用いた模刻を行うことで、観察力と造形力及び素材を扱う技術力を養う。更に、解剖学的理解の上に成り立つかたちのデフォルメを試みるなど、立体的な表現力の基礎を身につける。	
		コンピュータ表現基礎実習1	イメージ資料や企画資料の作成の前提となる、コンピュータスキルとして、画像編集ソフトを使った画像の調整・加工・合成の実習、イメージ編集ソフトを使ったマークやイラスト等の制作・文字調整の実習を行う。またこれらを組み合わせて、画像・文字の大きさや色合い、位置や間（ま）に配慮した判りやすく訴求力のあるレイアウト方法を身につける。画像やイメージを総合的に操作し、効果的なイメージ資料や企画資料を作成できるようにする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	技術科目	コンピュータ表現基礎実習2	プレゼンテーションに必要なコンピュータスキルとして、プレゼンテーションソフトの操作方法と、それを用いた判りやすく動きのある、効果的なプレゼンテーションツールの制作の実習を行う。また、ビデオカメラによる動画撮影の技術と、映像編集ソフトによる動画編集の基礎的技術の実習を行うことで、実写のオリジナル映像や記録映像を制作したり、動画のデータを効果的にプレゼンテーションに利用したりすることができるようにする。	
		コンピュータ表現応用実習	より高度な企画表現やプレゼンテーションを実現するためのコンピュータスキルとして、3DCGソフトによる物体や空間の、3Dモデリング、マッピング、レンダリングの実習を行うことで、企画内容のリアルな画像表現をできるようにする。また、モーショングラフィックの制作や、3Dアニメーション制作の基礎的な実習を行うことで、企画案のプレゼンテーションを、より魅力的で訴求力のあるものにするための技術を身につける。	
		材料加工実習A（紙・布・木）	紙、布、木のそれぞれ異なる素材の種類や特性について研究し、実制作を通して基礎的な材料加工技術を複合的に学ぶ。木材は、切る・彫る・継ぐ・磨くなどの加工技術を学びながら、テーマに沿った立体物を制作する。紙と布は、不織布と織布という観点から、立体にするための素材としての特徴を捉える技術を学ぶ。さらに紙や布を切る・剥ぐ・縫う・伸ばす・縮絨するなどの加工により、木材で制作した作品を原型として、立体物を制作する。	
		材料加工実習B（金属・樹脂・新素材）	金属や樹脂、新素材の種類や特性について研究し、実制作を通して基礎的な材料加工技術及び道具や工作機械（コンターマシン、ボール盤、溶接機、レーザー加工機等）の扱い方を身につける。ひとつの立方体を複数に分割した後、それぞれを型取り・注型・塗装・切断・曲げ・研磨・接着・溶接などの加工技法を用いて、鉄・アルミ・ピューター・合成樹脂などに置き換え、再び立方体に組み上げる。また立方体を収める箱をポリプロピレンシートで制作する。	
		材料加工実習C（土・ｶﾞﾗｽ）	土およびガラスの種類や特性について研究し、実制作を通して基礎的な材料加工技術を学ぶ。まず土とガラスで共通となる原型を粘土で制作し、それを石膏に写し取る。この写し取った石膏型を用いて、土とガラスでそれぞれ立体物を制作する。土とガラスの立体物はそれぞれ焼成する。この制作を通じて、土（陶磁器）とガラスの素材としての共通点と差異を学ぶ。また土の成形・焼成の技術と、ガラスの成形・焼成・加工の技術を同時に学ぶ。	
		デザイン製図実習	製図とは、デザインされた形態を第三者に正確に伝え、その制作を可能にするための手段である。製図の役割と、製図と図学の相違点を理解した上で、工学言語として標準化された製図総則の主要な規則に基づき、製図板を用いて、正投影正視画法（三面図）によって、様々な立体や空間を平面上に正確に表現する技術を身につける。また平行投影による３種の立体画法（キャビネット、ミリタリー、アイソメトリック）も習得する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	技術科目	デジタル工作実習	電子工作やデジタル工作機器の使用方法を学ぶために、オリジナル電子楽器を制作する。シンセサイザーやセンサー部分をArduino（マイコンボードとそのプログラム環境）を利用して制作し、電子工作についての基礎知識や制御のためのプログラムを学ぶ。またインターフェースやケース部分をレーザー加工機、3Dプリンタ等のデジタル工作機器を用いて制作することを通して、デジタルファブリケーションに必要な技術を習得する。	
		メディア表現実習	現代のメディアといえば、すぐにITを使ったメディアを思い浮かべるほど、その普及は急速であり、それは「情報革命」あるいは「第三次産業革命」とも言われている。この授業では、HTMLをはじめとしたプログラムや映像編集についての知識、ソフトウェアを使用する際の技術を習得する。その上で、現代社会における人と情報の関係性や問題について考察しながら、これからの社会のためのウェブサイトやウェブゲームに関するコンテンツを制作する。	
		シナリオ制作実習	マンガ・映画・アニメーション・ゲーム制作はもちろん、プレゼンテーションやコンセプト作りにおいてもストーリー及びシナリオ制作は、重要な作業である。まず民話や神話などにみられる典型的なストーリーの構造について、プロット制作のワークショップを通して学ぶ。その後、マンガ・映画・アニメーション・ゲーム等のシナリオを制作する。こうした実習を通じて、広く応用可能なシナリオ制作技術を習得する。	
		サウンドデザイン実習	サウンド（音）は、映像作品の音響効果としてのみならず、電化製品や自動車等の様々なプロダクト、交通機関や公共空間等、私たちの日常生活において幅広く活かされている。この授業では、音が人に与える影響や効果について調査・分析・考察し、サンプリングをベースにした作曲や、シンセサイザーやエフェクターを使用した音作りの基礎を学んだ上で、実際に特定の映像やプロダクト、場面や空間を想定したサウンド（音）をデザインする。	
		クラフトデザインA	反復生産が可能で、回転体を用いた形状を条件に、ロクロ成形技術や型成形技術等のハンドワークを用いて生活用品を制作する。使いやすさに加えて、美しさや心地よさ等をキーワードにデザインを考える。今までに習得した素材に関する知識をもとに、用途や形に適した素材（木・陶器・磁器）との複合も試みる。制作を通して素材に対する理解を深めると共に、生活を豊かにするために求められる、企画力、提案力を養い、それを実現するための知識を得る。	
		クラフトデザインB	反復生産が可能であることを条件として、ハンドワークによる材料加工技術を用いて作品を制作する。使いやすさに加えて、美しさや心地よさ等をキーワードに、日用品や装飾品のデザインを考える。今までに習得した素材に関する知識をもとに、用途や形に適した素材（木・布・金属等）の複合も試みる。これらの制作を通して、素材に対する理解を深めると共に、生活を豊かにするために求められる、企画力、提案力を養い、それを実現するための知識を得る。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	企画表現科目	企画表現演習1	デザイン学部の学生としての「学び」や、デザイン分野に関わっていくことについて、グループディスカッションを行い、専門の学びの態度を身につける。基礎的なディベートを通じて、他者の意見によく耳を傾け、自分の考え方と比較しながら検証する力や、様々な社会の問題に対して意識をもつ習慣と態度を養う。また大切な事柄を、的確に分かりやすく相手に伝えることを目的として、言葉や文章で表現するためのスキルを身につける。	
		企画表現演習2	デザインに必要な企画力とは、問題を「分析」し、解決案を「発想」し、プランとして「統合」する力の総体であり、そこには直感力と論理的思考能力の両方が必要となる。言語学における「生成文法」の方法論を応用した手法によって、新しい可能性を発見するトレーニングや、一つの発想を他に結びつけて展開するトレーニング等をワークショップ形式で行う。これらによって企画に必要な思考方法そのものを鍛える。	
		企画表現演習3	企画提案を行う際に有効な手段となる、フィールドワークによる情報収集・分析（リサーチ）の方法と、それを具体的な企画に結びつける方法を学ぶ。具体的な課題を通して「観察法（オブザベーション）」「ブレインストーミング」等の手法を学び、これらを用いて、身近な生活の中に隠れている問題やニーズを抽出し、改善策や解決のアイデアを立てる。さらにそれをプレゼンテーションソフトを使ってまとめ、発表する。	
		企画表現演習4	各々が履修している分野で、自分が興味のあるテーマから企画を立て、他分野の学生に対してプレゼンテーションを行う。互いに異なる分野の企画提案を聞き、意見交換を行うことで、企画の立て方や表現の技法の様々な可能性を発見し、優れていると感じる他者の取り組みについて、その理由を分析してレポートにまとめる。さらにそこから学び取ったものを自分の企画に応用して取り入れ、ツールや模型を用いてプレゼンテーションをブラッシュアップする。	
		企画表現演習5	特定のテーマに沿って、自分が履修している分野に関連した企画を立て、他コースの学生に対してプレゼンテーションを行う。次に、他コースの企画と自分の企画を繋げる展開を考えて意見交換し、相乗効果を得られる合意が出来た学生同士でユニットを作る。自分のアイデアや技術を、他者の企画をより魅力的にしていくために役立てることを意識しながら、共同企画をブラッシュアップし、その成果をツールや模型を用いてプレゼンテーションする。	
		企画表現演習6	「企画表現演習４・５」及び分野演習A・B・Cを通じて取り組んできた企画内容を、個々に整理し、自分と社会との繋がりを柔軟かつ多角的に思考する。その上で「自己ブランド」という視点に立って、自分の取り組みを最も効果的に表現する方法を考え、インターネットメディアや出版物等にまとめあげ、実際に社会に向けて発信可能なポートフォリオを制作する。完成度を高めたポートフォリオを用いて発表を行う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	企画表現科目	企画表現演習7	「企画表現演習４・５・６」及び分野演習A・B・Cの成果物をブラッシュアップした上で、デザイン学部全体として学内で一同に展示し発表を行う。その際、コースや分野を越えた多様な価値観が盛り込まれたそれぞれの展示内容を効果的に見せつつ、全体としての統一感を与えるための共通要素について企画案を立て、協議・調整を経てこれを決定する。さらに展示や広報の方法を考え、それに必要な媒体を制作し、学内展示を行う。	
	視覚デザインコース科目	視覚デザイン基礎演習	視覚デザインコースの「グラフィックデザイン」「マンガデザイン」「メディアデザイン」各分野に必要とされる基礎的な要素を、オムニバス方式の授業の中で課題を通して体験的に学ぶ。各分野の基礎知識と特徴、差異、共通点等を学び取り、複合的な視野も身につけながら、今後のデザイン学部における自分のキャリア計画に取り入れる。 （オムニバス方式／全１５回） （９　冨田　洋美／５回） 「グラフィックデザイン」では、最も一般的なメディアである「ポスター」をデザインすることを通して、この分野の表現における基本的な要素となる「文字と図像」について、その特徴、効果、扱い方等を体験的に学ぶ。 （１１　佐々木　果／５回） 「マンガデザイン」では、マンガやアニメーションなどの物語や時間によって展開するメディアについて、表現形式、文化背景などさまざまな角度から、その特徴や基礎的な問題について体験的に学ぶ。 （１３　土田　俊介／５回） 「メディアデザイン」では、可視化や可触化をテーマとしたデザインやアートの事例を知り、作品制作を行うワークショップを通して、作品によってもたらされる様々な「インタラクション」を体験的に学ぶ。	オムニバス方式
		グラフィックデザインA	ポスター・リーフレット・本・雑誌等、印刷物のデザインを、演習を通して学ぶ。企画から入稿までの工程を理解するとともに、制作上必要な知識や技術を身につける。具体的には、印刷技術と各種印刷物に関する知識、プレゼンテーションの方法、デジタルカメラによる撮影技術、レイアウト技術、DTP（デスクトップパブリッシング）に必要とされるソフトウェアの操作技術等を習得し、制作意図に沿った印刷物を実際に企画しデザインする。	
		グラフィックデザインB	イラストレーションについて、起源や歴史を概観し、伝統的な表現方法から現代の視覚メディアによる表現方法までを、体験的に学ぶ。マスメディアの発達とともに変遷してきた欧・米・日のイラストレーションについて、作品鑑賞と技法の演習を通して学ぶとともに、今日的な視覚メディアとしてのコンピュータグラフィクス（２D～３D）を用いて、社会性について考察した上で、実際にソフトを操作し、イラストレーションを制作する。	
		グラフィックデザインC	企業イメージ戦略におけるVI（ビジュアルアイデンティティ）について、開発から管理までを演習を通して学ぶ。実在する企業の事例を研究した上で、仮想企業を設定し、そのロゴタイプ、マーク等の視覚基本要素を企画しデザインする。ステーショナリー、看板、車輌等のアプリケーションに展開し、商品・パッケージ・パンフレット・広告等を一貫したイメージでデザインする。各過程の企画とデザインを通して、ブランディングの実際について学ぶ。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	視覚デザインコース科目	マンガデザインA	マンガの形式的な根本要素である、絵、文字、コマ、ページの意義と、それらをモンタージュすることの意義を学び、演習を通じてそれらを統合的に活用する力を身につける。特に「絵と文字の組み合わせ」「コマとコマの組み合わせ」を重視し、分節されたイメージと文字を編集する力をつけるための演習を行う。最終的にはマンガ作品の絵コンテを描くことで、内容の全体的な構成を意識しながらモンタージュを活用する力を習得する。	
		マンガデザインB	マンガ的な表現を支える重要な要素のひとつであるキャラクターの意義を学び、それを表現に活用するための演習を行う。キャラクターは、それが持つ特徴や性格という内面性が、外観のデザインとなって表わされたものであり、物語や世界観、演出意図などと密接に関係しながら成り立っている。キャラクター単独のデザインではなく、シナリオや絵コンテなどを構想する中でキャラクターを造形し、マンガ的な表現力を総合的に高めていく。	
		マンガデザインC	時間的に展開するメディアの特徴と意義を、絵コンテや編集などの演習を通じて理解する。特にアニメーションについて、実写とは異なるマンガ的な映像表現や音声表現の持つ可能性や問題を検討し、活用方法を学ぶ。また、視覚的訴求力と物語性という２つの面から映像作品を考え、その中でも物語表現に派生するリアリズムを、マンガ的表現における重要なテーマととらえ、広く現代におけるメディア表現の問題として、演習を通じて考える。	
		メディアデザインA	現実の空間におけるデザインやアートの事例を知ることにより、メディアの時間的・空間的拡張に対応したインタラクションを学ぶ。これを基に、現実の空間とデジタルメディアを繋ぐインターフェースとして、電子工作やコンピュータプログラミングを用いたデザインの演習を行う。デジタル技術を用いた現実の空間におけるインタラクション手法を通して、平面・立体・空間を複合的に捉えるとともに、デザインと技術を一体としたプロセスを学ぶ。	
		メディアデザインB	様々なメディアを用いたデザインやアートの事例を知ることにより、それぞれのメディアの特性を学ぶ。これを基に、コンピュータプログラミングやデジタル出力機器を用いたデザインの演習を行う。コンピューティングによる平面及び立体の制作手法を体験することで、デジタル技術によって可能になるデザインを理解するとともに、デジタルメディアの特性を活用したデザインにとって必要なメディアリテラシーを深める。	
		メディアデザインC	情報通信技術に関わるデザインやサービスの変化を知ることにより、情報化社会に対応したコミュニケーションデザインを学ぶ。これを基に、コンピュータプログラミングを用いたネットワーク情報の可視化表現の演習を行う。静的・動的な情報を分析・編集し可視化する手法を体験することで、ネットワーク情報を様々なデザイン分野に統合するための視点を学ぶとともに、情報通信技術を用いたコミュニケーション能力を高める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	視覚デザインコース科目	視覚デザインコラボレーション	デザインとは、ヒト・コト・モノの新しい関係性を生み出すための仕組みを考え、実現可能なものとして提案することである。他者や社会との関わりの中で、新しい可能性を見出し、それを実現するためには、あらゆる学問分野や産業と協力し合うことが重要になる。異分野とのコラボレーションを通じて、これまでの視覚デザインコースの授業で得た知識や技術を、様々な分野のために活かすための企画を立て、そのプレゼンテーションを行う。	
	生活デザインコース科目	生活デザイン基礎演習	生活デザインコースの「プロダクトデザイン」「インテリアデザイン」「ファッションデザイン」各分野に必要とされる基礎的な要素を、オムニバス方式の授業の中で課題を通して体験的に学ぶ。各分野の基礎知識と特徴、差異、共通点等を学び取り、複合的な視野も身につけながら、今後のデザイン学部における自分のキャリア計画に取り入れる。 （オムニバス方式／全１５回） （２　浅井　治彦／５回） 「プロダクトデザイン」では、暮らしの中で使う様々な道具や日用品におけるヒト・コト・モノの関係性を考察し、使いやすく美しい形状や仕組みを追究してデザインする過程を学ぶ。その上で、発泡材によるクイックモデルを制作する。 （１　西本　剛己／５回） 「インテリアデザイン」では、様々な空間の設計に共通して必要な素材や工法の基礎知識、動線を重視した空間構成の考え方、図面の読み方の基本を学習する。空間の平面図（白図）に、家具や什器のパーツを配置し、望ましいレイアウトを考える演習を行う。 （８　田中　久隆／５回） 「ファッションデザイン」では、人体の構造を理解し、基本的な被服構成の素材と技法を把握する。それを基に、具体的なイメージへ展開するためのデザイン画の基礎演習を行う。また、時代との関係を考察することで、社会におけるファッションの役割を学ぶ。	オムニバス方式
		プロダクトデザインA	暮らしの中で使う日用品のデザインを試みる。人の体の大きさや動き方を研究する人間工学を基本に、目的に合った形状や仕組みを理解してデザインすることを学ぶ。身の回りにある日用品をよく観察して、改善すべき点を見つけ出し、新しいアイデアをもとに試作する。試作を重ね、問題点を改良していくプロセスを経験する。 「手とかたち」「体とかたち」などをテーマに、使いやすく美しい製品をめざして企画を行い、その実物モデルを制作する。	
		プロダクトデザインB	マウス、ドライヤー、ハンディクリーナー等、内部に機械部品を持つ家電系生活用品をデザインする。まずは内蔵する機械部品の大きさと構成を想定し、使いやすさを考えながら基本設計を行う。さらに全体の形状や操作部等を、人間工学、ユーザビリティ、ユニバーサルデザインなどの観点から製品開発に必要な要素を考察する。ラフモデルで試行錯誤を繰り返し、問題点を解決しながら、機能的で美しいデザインモデルを試作する。	
		プロダクトデザインC	「ギフト」をテーマに、総合的な開発プロセスを学ぶ。ギフトにとっては、製品自体のデザインだけでなく、そのパッケージや購買層に適した価格の設定等も重要な要素である。実際の商品がギフトとしてどのような要素から構成されているかを認識し、製品、パッケージ、取扱説明書、POP（販売促進ツール）などの試作を行い、生産性・原価・利潤等も含め、現実の商品開発に不可欠な内容を盛り込んだ企画を提案する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	生活デザインコース科目	インテリアデザインA	「ディスプレイデザイン」の演習を行う。まず様々なディスプレイの実例を調べ、展示空間や展示内容について、種類・条件・制約等の違いがあることを認識し、ディスプレイの役割と本質を理解する。次に商品や展示物を視覚的にサポートするための、効果的なテーマ設定の方法や演出技法について学ぶ。こうした知識を得た上で、特定のクライアントを想定し、斬新なアイデアを含んだ具体的なディスプレイ計画を行い、その模型を制作する。	
		インテリアデザインB	「居住空間のリノベーション」をテーマとしたインテリアデザインの演習を行う。まずインテリアデザインの歴史を学び、現在のインテリアが確立されてきた過程を理解する。次に床・壁・天井の工法や素材、照明、設備、家具、ファブリック等についての基礎知識を身につける。最後に特定の空間を新たな居住空間としてリノベーションする想定のもとで、内装設計とインテリアコーディネート計画を行い、基本図面と3DCGイメージを制作する。	
		インテリアデザインC	「ショップデザイン」の演習を行う。魅力ある商業空間を作るためには、そこに置かれる物のデザインを考える前に、人の流れや間（ま）の導線計画を立てることが重要であることを理解した上で、商業空間の床・壁・天井の工法や素材、什器のデザイン、照明計画、及びVMD（視覚的演出効果）の基礎知識を身につける。最後に特定のクライアントを想定した商業空間の内装設計を行い、基本図面と3DCGイメージを制作して、プレゼンテーションする。	
		ファッションデザインA	ファッションデザインの基礎として、まず人（身体）とファッションの関係を理解するため「ファッションとは何か」「装うとは何か」について考察する。次に人体の構造や体型の違いによる変化を知ることにより、被服構成・被服素材を理解する。イメージをかたちにするための基本的なデザインの手法を学ぶと共に、正確に見る目と的確に表現できる手の訓練として、ファッションデザインに必須のスタイル（デザイン）画技法を学ぶ。	
		ファッションデザインB	ファッションと素材は密接不可分の関係にあり、デザインするためには、素材の重要性を理解することが求められる。ここでは素材の表面効果（色彩・テクスチャー）を中心に、着る・見る・作る、それぞれの立場からファッションを考察し、企画する。様々な素材加工技術の中から、エンブロイダリー、キルト、シャーリング、ピンキング等の技術を習得し、その技術から生まれる表面効果を新しい素材として用いたデザインを考え、制作する。	
		ファッションデザインC	ファッションは生活の一部であり、社会とも深い関わりがある。このことを理解した上で、機能に重点を置き、企画する。ファッションは衣服に限らず、あらゆるファッションアイテムがあるが、ここでは「服飾製品」として広く捉え、実際に使用したり、身につけたりすることができる製品のトレンドリサーチをして、ニーズに対応できるデザイン制作を行う。また、シミュレーションブランドを想定し、トータルな商品群を企画する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	生活デザインコース科目	生活デザインコラボレーション	デザインとは、ヒト・コト・モノの新しい関係性を生み出すための仕組みを考え、実現可能なものとして提案することである。他者や社会との関わりの中で、新しい可能性を見出し、それを実現するためには、あらゆる学問分野や産業と協力し合うことが重要になる。異分野とのコラボレーションを通じて、これまでの生活デザインコースの授業で得た知識や技術を、様々な分野のために活かすための企画を立て、そのプレゼンテーションを行う。	
	キャリア科目	自立と体験2	コミュニケーションやプレゼンテーションの原点となる表現力を養う。何かを伝えようとするとき、同じ内容でも表現の仕方で伝わり方は全く異なる。プロのパフォーマーの身体的動作や表情、話の構成の仕方等をヒントに、聞き手を引き込む様々なパフォーマンス（見せ方）をグループで調査し、それが他者の心をつかむ理由について分析する。その上でユニットを組み、各自のテーマと方法で、自己プレゼンテーションとしてのパフォーマンスを発表する。	
		デザインキャリア特別講義	社会で活躍するデザイナー、プランナー、企業経営者、編集者、ディレクター等をゲストスピーカーとして招聘する。様々な分野の専門家である講師が、それぞれの仕事を紹介しながら、各分野について講義する。これにより、社会には多様な職業や職種があり、企画表現が様々な役割を担っていることを知り、企画表現の社会における可能性を理解する。また将来につなげる学びとするために、専任教員による導入授業と振り返り授業を行う。	
		インターンシップ	就業意識を高めるために、インターンシップの実習を行う。事前学習として、受け入れ企業について調べ、どのような事業活動を社会に対して提供しているのかを理解した上で実習に臨む。企業における実際の業務を経験することにより、これまで学んできたことが、社会でどのように活かせるのかを整理する。同時に自分自身の就業観を確立する。実習終了後、学内で成果発表を行う。	集中
	デザインビジネス科目	ポップカルチャービジネス論	マンガやアニメーション、ゲームなどの大衆メディアは、非常に身近で気軽なエンターテインメントとして普及してきた。それらは文化であると同時に商品であり、個人の趣味であると同時に社会現象でもある。そのような経済活動と文化活動が交わるところで成り立っているポップカルチャーの意義や困難さを、様々な業種で働く人の経済力、仕事、人生などの問題を通じて考え、そこで生きていくことの問題や意義、可能性などを検討する。	
		照明演出論	照明は、生活空間・文化施設・娯楽施設等あらゆる場面で必要とされ、照明を適切にコントロールすることは、快適な空間を作り、感動を高め、様々な心理的効果を演出する手段として極めて重要である。光についての知識、照明の歴史、照明の種類や演出効果について学び、生活空間や商空間の環境計画としての照明デザイン、舞台やイベントの演出計画としての照明デザインについて、必要な基礎知識や演出の技術、制限や注意点等を解説する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	デザインビジネス科目	インタラクティブデザイン論	近年、パーソナルな双方向型情報機器が急速に発達し、製品や情報の扱い方がさらに複雑化している。インタラクティブデザインは、このような情報社会における、人と道具の様々な関係を総合的に解決するデザイン分野である。その一つである、情報機器の画面を中心とした操作性の問題を扱うインターフェースデザインと、これを含むこれからの情報テクノロジーを駆使したインタラクティブなデザインの可能性について考察する。	
		インターネットビジネス論	インターネットの急速な発達に伴い、情報の受発信の方法が大きく変化したことによって、ビジネスの方法も変化し、新しいビジネスも生まれている。ここでは、インターネットの歴史や、その基本技術について学ぶ。その上で、インターネットを活用したソーシャルメディアと、テレビや新聞などの既存メディアとの差異、更にソーシャルメディアを用いた広告や物販等の既存ビジネスへの影響、新しいビジネスモデル等について理解を深める。	
		ブランディング論	ビジネスに必要なマーケティングとブランディングについて考察する。まず、各種の市場ニーズ調査、消費行動、嗜好調査、商品販売、広告戦略、新製品の受容予測等、必要型、欲求型のマーケティングの考え方や知識を学ぶ。次に、企業や製品等と顧客や消費者との間に、理想的な関係を構築するブランディングの手法について学ぶ。企業戦略を基に、視覚的要素を中心に据えた、商品デザイン・広報・宣伝・販売・文化活動などへの展開を実例をもとに理解する。	
		ソーシャルデザイン論	今日、デザインは従来のように、形や色のような限られた要素や生産に関わるモノを扱うだけでなく、環境、少子高齢化、災害、貧富拡大など様々な社会の問題に深く関わり、それを解決する新しい仕組みや関係を構築することをも扱うようになった。エコデザイン、ユニバーサルデザイン、スマートデザイン、BOP (Base Of Pyramid) デザイン等の考え方や事例、手法などを理解して、デザインの新たな社会的な役割や価値について考察する。	
		デザインマネジメント論	デザインアイデアを実際に商品として市場に送るためには、形や色のデザインをするだけでなく、生産部門や流通部門、販売部門との、計画や調整などのデザインマネジメントが必要になる。また経営においてデザインを有効な企業価値とするためには、CIやブランディングの理念をまず組織内に根付かせる仕組みや工夫が必要である。様々なデザインマネジメントの方法論を考察することで、デザインとビジネスとの繋がりを理解する。	
		デザインと法	デザインやアートなどの創作物は、特許、実用新案、意匠権、商標権、著作権などに関する法律で保護される知的財産であり、ビジネスにおける対価もその裏付けがあってこそより確かなものになる。また知的財産は、国家経済のソフトビジネス戦略の一翼を担うものである。知的財産権の種類、法的・経済的価値、および契約法について学び、有効に活用するための基礎知識を身につける。またPL法（製造物責任法）についても扱う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目	卒業研究	卒業研究	これまでの学習で身につけた、デザイン分野での様々な企画や表現の技術と成果とを再確認する。そして学生各々が自分のもっとも得意とする分野での研究目標を定めた上で、それぞれ主査の専任教員によるゼミ形式での指導を受け、４年間の集大成となるような高度な企画提案の研究を行う。プロフェッショナルな意識を持ち、卒業研究として効果的で完成度の高いツールや模型等を用いたプレゼンテーションを行うとともに、研究報告書を提出する。	